
真・恋姫†無双～南北コンピの三国志～

クーロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜南北コンビの三国志〜

【Nコード】

N7075Y

【作者名】

クーロン

【あらすじ】

北郷一刀と幼なじみの南郷仙刀のコンビが三国志で大暴れ！！
「いや、ぜんぶ仙刀の悪ふざけだから！！」 「人になすりつけんな。サイテーだな」 「お前よりマシじゃアアア！！」
…まあ、こんな具合でお送りする三国志開幕です。

碌でなしの幼なじみ

幼なじみ

この一文字に何を考えるだろうか？

同い年のかわいい娘？ちよっと年上のお姉さん？それとも妹系？
だけどさ…現実ってきびしいよね…俺の幼なじみはさ…

「オラ、一刀さっさと打ち込めや。やらねーとシバくぞ」

…こんな奴だよ…

俺は北郷一刀。聖フランチェスカ学園の学生。正直、今メツチャ困
ってる。その原因が…

「ま、おれからいくけど。何やろっかなー 正拳、前蹴り、貫手、
上段、下段…どれがいい？」

このバカ>幼なじみくだ

因みに言っておくが今の状態は剣道場で向かい合っている状態。俺
は竹刀、防具とフル装備で相手は…

下は袴、上は空手着、そして素手。お前の方が有利だと思っ奴…
甘いよ…

実はこいつ目茶苦茶空手が強い。

ついでに合気道も。

あとタイキックもヤバいなガ。使見て習得したらしいけど…

色々あるけど何を言いたいかというと…

俺、絶体絶命

「仙刀、勘弁してくれよ。まだ死にたくない。ガチで。」

「大丈夫、死にやしねえよ。六分の七殺しにするだけだ。多分…」

「オーバーキルじゃねえか！しかも何だ多分って！！」

「運が良ければそうなるから大丈夫！」

「アウトじゃボケエエエエ！！」

で、この馬鹿が『南郷仙刀』なんごうせんとか碌でなし。小学校に入る前からの付き合いだけど…どうしてこうなった

素手同士なら普通に勝てるからつまらん。とか、ぬかしやがってこれ。異種格闘戦。

こっちの方が楽しいとか言ってるじゃねえよ。

頼むから地下闘技場行け。そして逝け。切実に。

外史入り（前書き）

やっと出来ました。

小説書くって大変ですね。

外史入り

SIDE 一刀

「ヴアアア、疲れた。体痛い。帰りたい。」

「弱すぎんだろ。何で素手相手に負けんだよ。」

「黙れ外道。いきなり金的とか何考えてやがる。」

仙刀は昔から空手バカだからやったら空手が強い。

あと、合気道も

タイキックもヤバいな

ガ。使見て学んだらしい。

及川を一撃で仕留めてたな、アレ…

ジジイに鍛えられた。護身用と言ってるけど…

武器持ちに素手で圧勝とかおかしいから。

動きが護身じゃなく殺る動きだから。

格闘のジャンルの多さもおかしいから。

他にも色々、手を出してたような…

そして部活中の剣道VS空手。これがウチの部の名物だったりする。

隣の空手部員全員倒したらこっちに来る。そして俺と試合（ルール、情け共に無用）

不動先輩も顧問もこれを黙認している。

そして、準備運動と称して倒され、隣で寝てる空手部の皆様。ご愁傷さまで…

こんな奴が生まれたせいで…

「で一刀。お前、寝てて良いの？世界史のレポあるとか言ってるなか

「つた？」

「ヤベエ！！資料館閉まる！！」

「あーあ、いつまでも寝てるから…」

「誰のせいだよ！！！！！」

「え？不動サン」

「お前だよ！！何、先輩になすりつけてんだ！！！！！」

「ノリ」

「舐めとんのかアアア！！！！」

「うるせーな。絶叫してないでさっさと行け。閉まんぞ。」

「仙刀。お前も来い。閉じてたら、しばくから。」

「ハ？やだよ。一人寂しく行けよ。」

「いいから来いよ。」

「へーへー、わかりましたよ。」

こんなやり取りは何時もの事。

俺達は着替えて、資料館に向かった。

SIDE 仙刀

なんとか、資料館は開いていた。面倒い。

そして一刀のレポに付き合う羽目になった。ダルイ。

この資料館は学園長が趣味で集めた物がほんどらしい。その金俺にくれ。

そんなこんなで色々骨董があるらしい。正直どうでもいい。

「お、三国時代の壺だつてよ。」

「メンマ入れだろ」

「あ！夏侯惇の剣だつてよ。かけー！！」

「錆びた鉄の棒だな」

「スゲエ！！金印だ！！」

「メツキだな」

「お前さ…もう少しは歴史に興味持てよ。」

「嫌だよ、地理で限界。それに俺理系だし。」

そう、何を隠そう俺は理系だ。歴史、古典とか無理。赤点常習。向上心0。

もう開き直っている。

…まあ、一刀にバカにされるとキレるけど。理科、数学はできるからいいの。

…バカにされたの思い出したらムカついてきた。後ろから、延髄斬りかタイキック何をやんのか考えていると一刀が

急に止まった。∴CHANCE!!!

「おい、仙刀。アレ見ろ」

「あ？」

正拳をしようとしたら話かけてきた。
チツ

「どうした」

「アレ」

一刀の指差す先には白服の男。
ぱつと見、同年代。
けどウチの生徒じゃないな。

「部外者∴泥棒か？」

「多分。アツ逃げた！何か持つてる。∴仙刀追って。」

「何でさ。いいじゃん別に。古くさいものの一つ百個盗られようが。」

「よくねーよ。てか、多いから。お前の方が足速いんだから早く行け。」

「人使いの荒いことで…。ま、追うけど」

一刀は後で殴る事にし、あの白服を追う。
当然、足音をたてずにだ。気付いてない…。油断してやがるな…。

狙うか。

SIDE 一刀

…アレ？あいつ、いい顔してんだけど…

あの顔すると碌なことしないんだよな。

あ、跳んだ。て、事は…

「逃げてエ！その白服！！超逃げてエ！！！」

叫んだのが悪かったのか、白服が振り返った瞬間にバカのドロップキックが顔面に突き刺さる。

そのまま白服は倒れて後頭部強打。

うん、綺麗なドロップキックだ。

タイガー。スクモホレボレするだろう。

そして、綺麗な着地。

直後

『パリーーン！！！！！！！！！！』

快音。

まあ、こうなるよね

「よっしゃ！！成功！！！！！！一撃で仕留めたぜ！」

「大失敗だよバカ。どうすんだよ…えっと鏡だなこれ…」

カバンを置いて近づく。うわ、粉々じゃんコレ。どうすんだ。

「ハア？鏡？これが？ボケたか？良い病院紹介しようか？」

「うつさい黙れ。昔はこうなの。つか、どうすんのこの鏡。あんなとこ置かれてたし、多分かなり高いぞ。」

「マジで？」

「うん。学園の物だし、たぶんかなり弁償することになるな。絶対修復無理だなこれ…」

ピロリン

あれ、今こいつ何した？

「よし、逃げるぞ」

「待てやゴラ。何しに行く気だ。」

「この写メ見せて一刀が鏡割ったことにするだけだ」

「何てことしようとしてんだ！！！！」

「だってお前の言い方だとメツチャ金取られそうじゃん！！ケツの穴ちぎれるまで！！」

「無えよ！！二つの意味で無えよ！！！！」

コイツ…正真正銘のクズ…っ！！

「止める！！放せ！！掴むな！！」

「放したら逃げるだろうが！！」

「うん！！」

「絶対に放さないからな！！放したら俺に全部なすりつけるだろ！！」

「当たり前だアア！！」

「小学校から道徳やり直せエエ！！」

…武道って、人間教育も兼ねてるんじゃないっけ？

武道やってガチのクズがいるんだけど、なんとかして下さい。そんなことしてたら急に仙刀が抵抗を止めた。

「おい、一刀…後ろ…」

仙刀に言われて振り向く。そこには

粉々に砕けた鏡から光が溢れだす幻想的な光景
思わず力がゆるんだ。

「今のうちっ！！」

「逃がすかあ！！」

その瞬間逃げ出しやがったクズのズボンの裾を掴んで捕まえる。
ベブオとか奇声を発したが気にしない。

「お前掴むな！！鼻打った！！」

「ふざけんな！！てか、何で俺のカバンも持って逃げようとしてんだ！！」

「お前の財布と貴重品をパクるために決まってんだろっが！！」

「最低だよ！お前！！」

必死で格闘してると何やら引つ張られる感覚。まさか…

「お前何やってる！！引つ張んな！！」

「違う！！鏡が吸い込んでる！！」

「どういう理屈だよ！！」

「分からない！その白服何か知ってる！？」

仙刀が蹴り飛ばした奴に話を振る。

…頼む…答えてくれっ！

だが祈り虚しく、そこには完全に伸びていた白服。

「へんじがない。ただのしかばねのようだ…。」

「なんでそんな余裕なの！？ってウワッ！！」

急に吸引力があがった。ヤバい外れるっ！

「よし、剥がれた！！これで勝て「逃がさんつつ！」ギャアアア！
！また取り憑かれた！！お前何なの！？新種のボ○ビー！？」

「許さない…逃げるなんて…絶対に…！！」

ここで逃がしたらマズイ！！！！

「ヤンデレ風に言っな！！キモいから！！くそっ！！手を蹴れば…
分かった蹴らない！！止める！！だから登って来んな！！腰から手
を放せ！！」

「ヤダ」

「正気かお前！！」

傍からみたらヤバい画だけどそんな事気にしてる場合じゃない！！

「オマエハミチヅレダ…」

「怖エエエ！！怖いから止める！！」

「オマエダケニゲルナンテユルサナイ…ッ！！」

「ぐああああ！！貴様ああ！！」

SIDE 三人称

末代から呪ってやるからなあああ！！！！

という叫びが止み静かになった資料館。

その伸びた白服以外にもう一人いた。メガネの男が

「やれやれ、災難でしたね、左慈。大丈夫ですか。」

眼鏡の男は伸びている白服に話し掛ける。

「ん、くああ」

「お目覚めですね。さあ、帰りましょう。」

「……………」

「左慈？」

左慈と呼ばれている白服は目を覚ましそして…

「あれー、ここどこー？」

強い衝撃で記憶喪失プラス幼児退行していた。

そして眼鏡の男を小首を傾げてクリックリの目で見える。

「クハッツツ!」

そして資料館の一部が紅にそまったが、それは些細なことだろう。

外史入り（後書き）

次回から本編になります。

これからもこの駄文をよろしく願います。

キャラ紹介 主人公（前書き）

本編の前に。

読み飛ばしてかまいません

キャラ紹介 主人公

オリ主：南郷 仙刀 > なんごう せんとく

性別：男

立場：武将

特記事項：格闘好き 特に空手、合気道。他の武道の技も使います。

名前：北郷 一刀

従来の主人公。むしろ、同姓同名のオリキャラの扱いが正しいかも。

立場：文官

特記事項：この作品では蜀✓で甘やかされるのではなく、成長する一刀を書きたいと思います。
突っ込み、ぼけの両刀使い

名前：????

真名：????

性別：????

特記事項：とある有名諸侯の関係者。

外史で出会うオリキャラ。仙刀、一刀が成長するためのキーマンを

予定。

キャラ紹介 主人公（後書き）

次回から本編に本当に入ります。
よろしく願います。

まさかの修業編！？（前書き）

本編スタート

よろしく願います。

まさかの修業編！？

SIDE 仙刀

「一刀！！お前のせいで変なところ来たじゃねえか！！責任とって去勢しろ！！！！」

「黙れ！！お前が鏡割ったせいだろうが！！責任とって腹切れや！！！！」

何か周りの景色がドラ○もんのタイムマシンで入れる空間っぽいけど気にしてる場合じゃねえ！！こいつを始末するのが先だ！！

「大体何でまだ俺のカバン持ってるの！？」

「パクると言っただろうが！！」

「返せ！！」

「ヤダ！！」

いい加減しつこい野郎だ……
そろそろウザイ

「あー！！とりあえず腰から手を離せ！！」

「タラバツッ！！」

SIDE 三人称

さて、ここで賢明なる読者諸兄に聞きたい事がある。
柔道技で内股というのをご存じだろうか？

知らない方への説明としては簡単に言うと
相手を掴み片足で相手の太股をとって投げる技だ。

この際、股関節あたりを狙うのがポイントとされている。
尚、身長差が大きい。技使った方が下手な時には股間強打の惨事になる。

そして一刀の身に何があつたのかは想像にお任せしよう。

そして、この状況下で喧嘩、罵りあいをする二人を見て

『ああ、こいつらはバカじゃないか』

と思つた管理者が多数いたそうな。

『あれー？変なとこ来たよー？宇吉ー。』

『ムフフフフ。このご主人様なら私の愛を受けとめてくれるかもしれないわねん。』

『ム、抜け駆けは許さんぞ貂蟬！！』

大絶賛キャラ崩壊中の奴と漢女の管理者をのぞいて…

SIDE 仙刀

「そのまま落ちろ！！」

「んぐ、わアアア！！」

足腰を一気に振って投げる。

それで一刀ボ。ビーは剥がれた。

「仙刀貴様！！氏ねええ！！」

「恨むなら、あの世で恨みな（笑）」

突如閃光。そして一刀が消える。

「！？何で！？」

そしてまた俺も、のまれた。

白き輝く衣身に纏い天の御遣いが降り立つ。

『華琳様！！外を御覧ください！！』

『ええ、秋蘭。見えてるわ。』

その者。一人は己が拳で、

『雪蓮。』

『ええ、分かっているわ、冥琳。あれは、益州の方ね…。』

もう一人は己が知で、

『愛紗ちゃん!! 鈴々ちゃん!! あれ!!』

『ええ、ですが…』

『遠いのだ…』

天下に平和をもたらさん。

『桔梗様!! あれを追わねば!!』

『…焔耶。あの山。流星が落ちた山には近づいてはならん!!』

『何故ですか!!』

『あの山は…』

『黄忠様』

『そうね。各部隊に伝達を。命が出るまで待機。』

『ハッ』

『あれはもう…。どうしようもないわ…。』

『カイオウ様!!!!!!』

『ふむ…擂台にのう。』

天下が動き始めた。

SIDE 仙刀

っ痛ー。なんだここ？

視界が開け目に入ったのは
少龍寺とある建物。
周りは山っぽい。

「なんだ…ここ。」

！！？？

突如悪寒。

「ふむ…よき反応…。筋は良いのう。」

バックステップで間合いをとって相手を視界に入れる。
なんだこいつ…ジジイか？…
さっきの感覚も何だ？

「多少、拳法をかじってるみたいじゃのう。」

ジジイだ。多分そうだ。

だけど何だこいつは？

肌は皺で鱗のようだ。

髪は真っ白。声も皺枯れている。

拳法衣を着たジジイ…

いや、そんなことはどうでもいい。

ただ…

（スキが無え！！）

只、立つてるだけ。しかし威圧感がおかしい。異常だ。構えは崩さない。

そのまま話し掛ける。

「すま…すいませんお聞きしたい事があります。」

「何じゃ、言ってみい」

普段使わない敬語。

なぜかこいつには有無を言わず使わされた。

「俺以外にもう一人来ていませんか？黒髪で同じ制服着た男が。」

「いや、おらんのう」

「刀はいないらしい。」

「あいつ…どこいったんだよ…」

「それより。」

急に話し掛けられ意識を戻す。

「そこは、擂台というてのう。拳闘の場じゃ。」

「そうなのか？」

完全に土足…悪いことしたな。

「すいません」

「いや、別に良い。」

頭を下げるのを止めた。

じゃあ、何でそんな事言っただんだ？

「見た所、ぬしも拳法をしとる。そして擂台で向き合っ
ておる。…
やることは一つしかあるまい。」

そういつて口角を吊り上げる。

このジジイがヤバいという感覚はある。

…だけどさ…

「そうですね。一試合やりますか。」

好奇心の方が優ってる！！

この人と試合したいッッ！！

「ふむ、その前にぬしの名を聞いてもよいかの？」

「南郷仙刀と言います。」

「わしは界皇、と呼ばれておる。よろしゅう。」

「よろしく願います」

挨拶し、そのまま頭は下げずに踏み込む！
先手とつた！

昔からやってきてもう何千、何万ダースやってきた正拳 それは…

「青いのう」

当たった。確かに当たった。

…なのに…入った気がしない。

「どうした？打ち込んでみよ。」

「言われなくてもツツ！！」

正拳、前蹴り、手刀、下段蹴り、貫手、掌底。この技が全て当たった。

…なのにツツ！！

「よしよし。基礎は出来ておる。上達は早いじゃろうな。」

紙に当てたぐらいにしか感じないツツ！！

なんだよこれ！？

「次はわしじゃ。ホレ」

ゆっくりした拳。

だけど…俺は…

「！？」

全力で退いた。

…体から冷や汗が止まらない。

なんで？あんなヨボヨボパンチに…

「ッオオオアー!!」

タイキツク!!

一刀と及川を実験だ! モルモットにして鍛えた技。
それを…

「ヒュウ」

宙を舞う界皇。

分かった。この手品の種が。

「…消力>シャオリ<…ですか?」

「気付いたかのう。よもや、知っておるとはな…」

消力。

人間は通常、衝撃がくる際には体が固まる。

それを逆に体を軟らかくすることで衝撃を逃がす技。

それが消力

巧夫の奥義だ。

「それッ」

「ッハッ!!」

腹に一撃もらった。

胃と肺の空気が一目散に逃げ出す。

そのまま地面に叩きつけられる。

辛うじて受け身を取り頭を守る。

「ふむ、大分加減したんじゃないが…」

有り得ない。

それであれかよ。

足が震える。怖いんだ。

だけど…

「呼ッッ！！」

逃げない！！

真っ直ぐ正拳を加える。

絶対に一発ッ！！

フワッ

回転する世界。

足元に空がくる。

そして俺の意識はブラックアウトした。

SIDE界皇

「誰がある？」

「ハッ！」

「この者を休ませよ」

「御意！！」

フム、良き士。

良き強者。

あれで諦めずに向かうか。

恐怖を知りて尚。

最後のは意志の籠もった一撃じゃった。

…育ててみるか。

そしてゆくゆくは…

ふむ、楽しみじゃ。

まさかの修業編！？（後書き）

戦闘シーン書くのキツい…
誰か文才を！

カイオウゝ強くなりたくばゝ（前書き）

原作キャラとそろそろ絡めます。

仙刀はどうしょうか？

カイオウ、強くなりたくば、

SIDE 二刀

「っ痛ー。」

あの馬鹿に投げられた。

ついでに股間も蹴られた。

…絶対に復讐してやるからな…！！

「てか、ここどこだ？」

現在地は何故か荒野。

…資料館に居た筈なのに

あの鏡のせいかな？

…それしか考えられない。

てことは…あいつのせいで…！！

「……………！！」

突如、後ろの茂みが揺れる音。

バカが居るのか？

「！！」

一際大きくなった。

今だ！！

「うらアア！！」

飛び蹴で仕留める！！
恨みを全てこめてなあ！！

「…アレ？」

しかし足の先に居たそれはバカではなく、
黄色い布を頭に巻いたおっさんだった。

「「ア、アニキイイ！！??」」

あ、ヤベ。

人違いだ。

・・・

「じゃ、そゆことで」

「「待たんかイイイ！！」」

さりげなく帰る作戦…失敗

「お前！！よくも兄貴を！！」

「ゆ、許さないんだな！！」

ヤバッ

怒らせちゃったよ…

「すみません。悪気は無かったんです。」

「あんな飛び蹴しといてか!？」

「ホントすいませんでした。人違いで…」

「それで許されるワケ無えだろ!!」

「申し訳ございません」

悪いのはこっちだ。

本当に申し訳ない。

「チツ… 本当に謝る気があるんなよ…」

そう言つてノツポが腰に有るものに手を伸ばす。

…あれは…剣？

まさかね

「身ぐるみよこせや!!」

澄んだ抜刀音。

本物？

「…銃刀法って知ってます？」

「ア？何言つてんだ？」

知らないの!？

どんなド田舎でも有り得ない。

てか、『身ぐるみよこせ』ってどこの山賊だ。
うん…賊…？

「オラアアア!!」

「!？」

切り掛かって来た!?

足元を見ると草が切れてる。

え、何?マジ?

ガチ剣!?

「嘘!?!その剣本物!?!」

「ああ、そうだよ。へへッ…、ビビッてんのかあ」

いや、そうでもない

残念ながら仙刀の空手の方が怖い。

…てか、怖さが、刃物<仙刀ってどういう事だ…

でも…

こっちは素手。向こうは剣持ち。

ヤバい事には変わり無い。

どうする…?

「うつくう」

「兄貴!!」

「お、起きたんだな!!」

ヤバいな…復活かよ…

「よくも、俺の顔蹴ってくれたな…」

こいつも剣持ち。

逃げようにも、逃げれる気がしない。

…万事休すか…

「待てーい!!」

遠くから誰かの声。

…なんかゴレン。ヤイが頭をよぎった。
違うよね？

「この賊共が!!その御方に手を出すな!!」

「ひでぶっ!!」

「あべしっ!!」

「たわばっ!!」

一瞬でのされ、世紀末的雑魚風にやられる山賊（仮）

「この賊共!!劉玄徳が一の家臣、関雲長が討ち取った!!」

ハ？劉備？関羽？

…何言ってるのこの人。

SIDE 仙刀

「998!!999!!1000!!」

日課の空手の基本技各千本を終わらせる。

ここに来る前からの日課。

今、俺はここ少龍寺>シャオロンジ<で修業をしている。
半年前

『お願いします!!俺を鍛えて下さい!!』

俺は土下座して頼み込み、界皇様に弟子入りした。

快諾してくれたのは、正直かなり嬉しかった。

俺は界皇様の強さ、レベルの高さに惹かれた。

いや、違う。

…魅せられた。

あの技に

そして俺の修業が始まった。

「『氣』ですか。」

「左様。」

先ず、習ったのが氣。

どうやら、生命エネルギーらしい。

それは女性に多いとか。

…だが気になったのがコレだ。

「それが豊富な者程強い。故に女子が強い。」

どうやら基本的な強さは

一般女性<男性<氣の豊富な女性らしいが。

こんなこと聞いた事無い。

こんな有り得ない理論が通る。

そこから異世界じゃないかと判断した。

しかし、女が皆強いとかいったら…

…元の世界も同じか…

頭に過った俺のジジイで空手と合氣の師匠が婆ちゃんに追い回される姿を思い出し考え直す。

…それよりもだ。

…あの糞野郎のせいで異世界に送られたのかッッ!!

あいつは俺の拳で潰すッッ!!

「さて、やってみると良い」

早速、氣の体感になった。

瞑想して感じるらしい。

しかしこうしてると眠くな…

「どこだ?」

「ようこそいらつしゃいました。南郷殿。」

「!?!?…誰だ。」

「お初にお目にかかります。宇吉と申します。この度は恩を返したくお呼びしました。」

「ホントに誰?初対面なんだけど。」

「ですが、あなたのお陰で左慈をモノにできました。重ねてお礼申し上げます。」

「うーん、記憶に無いな。」

「まあ、こちらの話ですから。そして私としては何か恩返ししたいのですが…」

「なら…」

そして俺は宇吉には氣の修業を頼んだ。

どうやら夢の中でも術で干渉できるらしく、夜に氣の修業となった。

…その結果。

昼に拳闘

夜に氣の修業（睡眠学習）
となった。

何このスケジュール

甲子園常連の野球部よりキツくね?

日に二十四時間、いや三十時間の矛盾ッッ!!

に近い修業の日々
しかもその内容が…

「猿退治？」

「ウム。」

一つ目がこれ。
しかし只の猿じゃない。

『ホキョアアアッ！！』

…夜。猿？

…死にかけたよ。マジで。勝ったけど。
小便チビらなかっただけマシか…
確かにアレなら地上最強の生物も満足するだろうよ…ッ！！

二つ目が…

「また猿退治ですか？」

「然り。これはわしが案内しよう。」

そして来たのが
やったら草木が薙ぎ倒された場所。

「アレを倒せ」

「…………アレって」

真っ黒な体毛

鋭い牙

鬼みたいな二本角

「金獅子？」

「よくわかったのう」

… コレは無い。

「おお、そうじゃ。」

界皇様が奴の後ろに近付きなさる。

… まさか！！

「それ」

手刀による一閃。それで
奴の尻尾を切り落とした。
マジで勘弁してください

『……………ツツ！！！！！！』

言葉にならない咆哮。

え、倒すの？あれを？

当然、黒かった体は金色へ

あの超野菜人っぽくなってる。

「頑張るのじゃ」

「え？帰んの？ちょ待て」

『……ツツツ……！！！！』

「せめてネコ飯を食わせてえ！！！！」

ハンターの皆様の偉大さがよく分かりました。

G級の方々。頑張つて。

そしてネコ可愛がつてね。

チケツトいっぱい持つてるリーダーもね。

その修業をし、帰つて来たら…

「ツツ！！」

不意打ち

やられたらメシ抜き。

不意打ち、奇襲は受ける側の未熟だとよ。

…俺のジジイにもやられてたよ。残念ながら。

そんな環境下だから、氣は内氣功と治癒がかなり出来るようになった。

外氣功とかあるらしいけどムリ。

使える奴いんの？

そんな感じのことを振り返っていたが中断された。

「南郷。」

「ん？」

「界皇様がお呼びだ。付いてこい。」

呼び出しかよ。しかもまた。

「げ、またヤバいのやらせんじゃねーか？あの人…」

「さあ？」

同じ門下の人と話ながら、いらっしやる本堂に向かう。
今度は何を言われるやら…

「南郷よ」

「はい」

いつもとは違う。

門下がかなり本堂に集まっている。
…こつ見るとかなりいるんだな。

「ぬしが入門し半年が経った。」

「そうですね。早いものですね。」

なるべく当たり障りないことを言う。
この人の気紛れは俺の命に関わる。

「して、ぬしの目的は何だったかのう？」

「えーと、何だっけ？」

「忘れたのか？」

「いやー、すいません。余りに此処での修業は中身が濃いですから。」

ホントにな。

「なら、これで思い出すかのう？ホレ。」

「これって……」

渡されたのは、修業始める際に預けた荷物。そして制服。目的……あ！！

「あの野郎!!!ぶっ殺す!!!YAI!!!HAI!!!」

「…思い出したようじゃのう。」

界皇様が何か仰ってるが関係無え！！！！

ああ、一刀。オマエヲハヤクシマツシタイヨ……

「ぬしが来た時と同じ事がおこったぞ。」

「マジでござりまするか!？」

そうか……これで一刀の手がかりが！！

「界皇様！！いますぐ消してきます！！」

「落ち着け。たわけが」

「べブッ!！」

頭へのチョップが入った。
マジ痛い。

「そもそも何処の話と想ってるのか」

「此処。」

「違うわい。」

「なら何処ですか?」

体がソワソワする。

ホント…何処にいるのか…

「東」

「は?」

「ここからずっと東じゃ」

マジ?

何、面倒臭いところに落ちてんの?

「そこでじゃ。ぬしはその友「実験台です。技の。」…まあ、その者の所にいくのじゃろう。」

「…そういう約束ですしね。」

そう。修業当初の約束。

一刀の居場所を突き止めたなら教えてほしい。
厚かましい願いだなんて分かっている。

だけど教えてほしい。

俺が土下座したのもコレが理由だったりする。
やっぱ一刀を放っておく、なんて出来ないから。

「じゃから、南郷」

「ハッ」

「ぬしを破門とする。」

「ハ？」

え？今、なんて…？

「ちょっと破門ってどういう事ですか！？」

「破門。師が門人との関係を断ち門下から除くこと。じゃ。」

「意味じゃねえよ！！何で破門の必要が…！！」

「なら、巧を成さずして皆伝にしてもらおう気かの？」

「違いますよー!!」

「まあ、これは決定じゃ。覆らん。諦めよ。」

そんな…

ヤダよ。そんなこと。

絶対に。

「そのような顔をするでない。代わりにぬしには号をあたえよう。」

…号？

「ぬしは相手の攻めを受け入れ守ること、そして攻めの激しさ。その緩急さながら海の如し故に…」

「号を『海皇』。南郷海皇を名乗るが良い。」

なんだよ。それ。

「……………」

「どうした？海皇。」

「その号。海皇。ありがたぐいだだギバズー!!」

正座し、深々と頭を下げる。

嬉しい。

目の前がぼやける。

ホントに、嬉し泣きつてあるんだな。

「よかるう。最後じゃ。この言葉を心に留めよ。」

顔をあげる。

真っ赤な目なんて見られていい。

「強くなりたくば喰らえッッ!!

昼も夜もなく喰らえッッ!!

強者を喰らい続けよッッ!!

して、ぬしは喰われ飽きぬ者であれ。

いくら喰われようが喰われ飽きぬ者。

高き壁であり続けよ。」

「その言葉、ぜっだいにわずればぜんッッ!!」

涙をぬぐう

深呼吸。

「ありがとうございます!!!!」

最後に頭をまた下げる。

もう、二度と会えないかもしれない。

…強くなります。

制服に着替える。

懐かしい着心地。

ここんとこずつと拳法着だったしな…

一刀。

すぐにそっち行くからちょっと待ってろ。
元の世界に帰ろう。

堂から出る。

最後に一礼。

なんか、頭をあげたくない気がする。
でも…行かないと。

「…荷物忘れとるぞ」

最後の最後で何やってんだ俺…

SIDE界皇

「よろしいのですか？」

「何がじゃ？」

「号です。破門の身でありながら…」

そのことが…

「よいよい」

「界皇様！」

「わしは意外と美食家じゃ。」

「……………」

「そして小龍寺は同門の本気の戦いを禁じておる。」

「……………!!」

気付いたようじゃな。

南郷よ。ぬしはこの世で一番の美味を知っておるか？

皇帝でさえ喰らえぬ美味。

それはよい芳香の強者。

その技を全て下して勝つことじゃ。

ぬしなら集めるじやろう。

その芳香を

ぬしからも漂うやもしれん

その日を楽しみにしとるぞ。

何はともあれ先ずは長生きじゃな。

ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!

カイオウゝ強くなりたくばゝ（後書き）

若干シリアス（？）

やっぱシリアスってキツイ
…キツイのばっかだ

V S 雷銅！……ここは益州、白帝城（前書き）

戦闘パート多め

体力がやばい

VS雷銅！――ここは益州、白帝城

SIDE 一 刀

「お願いします！私たちに力をかして下さい！！御遣い様！！」

今、劉備って名乗る女の子に頭を下げられている。

今、分かっている事は

一、目の前の三人は劉備、関羽、張飛の桃園三人組だ。

二、今の世の中は黄巾賊がいる。

三、現在進行形で乱世

四、俺は天の御遣い

だ。

最初はドッキリだ、と思っていたが、
さっきの賊は

黄巾賊であることに間違い無いらしい。

そもそも、本物の武器を持っているんだ。

今の日本なら有り得ない。

で、一番頭を悩ませるのがコレ

この三人、全員女だ。

どうやら過去に飛ばされたんじゃない
パラレルワールド的な場所に来た。

…この原因つてさ。

頭に怨敵の顔が過る。

全部あいつのせいか…!!

「お願いします!! 今、力の無い人達が虐げられています!!」

「その世の中を変えるため力を貸してほしいのだ!!」

「皆が笑って暮らせる世を作るため協力して下さい!!」

……………

「うーん、大した力には成れないけど、協力するよ。」

正直、この話を蹴る気は無い。

また一人でいたら絶対賊に襲われオダブツだ。

「ありがとうございます!!」

だけど、これは言わないと。

「でも、天の御遣いを名乗るのは不味いと思う。」

そう、これがもし本当に後漢

三国時代なら

天 皇帝だ。

そして、そんなの名乗るなんて、皇帝に対しての喧嘩以外の何物でもない。

「でも、それじゃあ人が…」

「うん。だから、どこか集まる場所…公孫賛の所の義勇軍に成るのが良いんじゃないかな？」

「あ！白蓮ちゃんの所か！！」

「桃香様…まさか忘れていらしたのでは…」

「えへへ♪」

これが劉備…ね

…皆が笑って暮らせる世。か…

そして、戦う…か

劉備、危ないよ。

その理想。

SIDE 仙刀

お、着いた。

界皇様が仰った方に行ったら城があった。

「先ずは情報だな。」

そして一刀の情報を集めるため入った…けどさ。

「うーわ、何コレ？」

アスファルトなんてひかれてない道路。
車は無い。

電車も無い。
服が昔。

「…映画村？」

有り得ない。

異世界の上、タイムスリップとか何？
ガチで止めて。
で、

「おい…、こっちはなあ、出すもん出せや、つってんだよ。」

「や、止めて下さい…！今、家にはそんなお金が…」

「アア？なら娘出せや…！」

「キャアツ…！」

「お母さん！？」

そっちは何やってんだか。

なんか…助けに行け…！的なものの匂いがプンプンする。

ま、試したい事あるし丁度いい。

「…！？ああ？てめえ何か用でもあんのかよ？」

わざと肩をぶつける。
やっぱこっくるよね。

「……………」

「てめえ…何か言えゴルア」

田舎のヤンキーを上回る首の傾き。

そして、メンチビーム

いやー、

「弱そ」

「「何だとゴルア！！！！」」

一言で切れてくれる三流ヤクザ
実験台に丁度いい！！

「うらぁ！！」

パンチ。遅ッ。

左手で払い、右の手刀を首へ。
滑らかに入る。

「ッハ！？」

一撃で沈む。

「「てめえ！！よくもやりやがったな！！食らえ！！」」

今度は二人同時。

今度の狙いは足。

「「ん なっ！！？？」」

体を屈めて軽く体当たり。
それで相手が倒れる。

「「ン バッ！！」」

倒れた所で足刀を首に。
それで終了。

「うん。強くなっている。」

数秒で片がついた。

あの修業が身についてない。とかなっていたら、死にたくなるしな。
いや、良かった。

「良いねえ、アンタ。強いねえ。」

！？まだ居た！？

「そう身構えんな。俺は警備隊の人間だ。そいつらの親玉じゃねえよ。」

「そうか。ならアレ豚箱にぶちこんどいて。」

さよならモルモッツ

「ああ。だがその前にだ。」

あ、戦闘フラグ

「あんと手合せ願いたい!!」

ほら見る。

申し出は快諾。

しかし街中という事もあり、現在は移動中。

「そついや、お前いつから見てた？」

「さっきの喧嘩かい？アンタが肩をぶつけた所からだ。」

「警察がそれってダメだろ」

笑いながら答える

「ハッハー!! 違いねえ!! だが喧嘩好きってのは俺の性分だね。死ぬまで治らねえよ!!」

こいつ楽しいわ、やっぱ。

メツチャ良い奴だ。

豪快な性格。

馬が合うってこの事だな。
きつと

外見は2メートル近い大男。

髪は銅色で、ライオンを連想する髪だ。

筋肉質な体。

筋力勝負は不利だな。

そして片手には二又になった槍。

その後ろは鉄を固めてある。

刃の付け根には虎の皮が巻き付けられてる。

重そうだ

会話を楽しみながらも観察は欠かさない。

敵のタイプは把握しないとね。

「でだ、今何処に向かってんだ？」

「ああ、手合せなら審判が必要だろうが。お、居たな。」

視線を前にやるとコレまた大男。

鹿の角みたいなのがついた兜に

全身に鎧を纏っている。

そしてやっぱり武器持ち。

槍だ。ただ突きと斬るを両方求めてか刃の部分がデカイ。

「おーい忠！！こつち来てくれよ！！」

「む、慶にござるか。」

どうやら、友ダチみたいだな。

「おう！！これから一手仕合つからよ。審判やってくれや。」

「よかるう。」

話。ついたみたいだな。

「さて、仕合うか」

「え？ここ？」

普通に街中だぜ？

「何言ってるんだよ、あんた。あんたも戦人だろ？戦いを楽しむ奴の面してる。」

真っすぐ俺を見据える。

こっちも観察されてたって事か。

「俺の言葉、間違っているかい？」

喧嘩は試合と違う。

危険なものが多いところなんてサイコーだ。
そして見物客は

「…大正解だよッ！！」

多いほどいい！！

「待たんかア！！」

突如一喝。

…楽しい所で ハア

「なんだよ。出鼻挫きやがって。」

「慶。我らは警備隊にござる！街中での私闘など唾棄すべきことなり！！」

「チツ頭固いな、おい。」

「なんとも言うが良い。道場はそこにござる。」

「分かったよ。じゃあアンタ行こうぜ。」

「ああ、さつさとやろう。」

指差す方へ行く。

道場は意外と広い。

…暴れても大丈夫だな。

「所で、アンタの名前は何だい？

いつまでもアンタは悪いだろ。

ちなみに俺は雷銅。只の戦人だ。」

遅れながらも自己紹介。

なら、俺も名乗らないとな。

「俺は南郷仙刀。よろしく。」

「へえ…珍しい名だな。どう分けるんだい？」

「名字が南郷、名前が仙刀。てか、普通じゃない？」

「普通じゃねえな。名字なんて初めて聞いたぜ。」

何だこの世界？

俺の常識が通じないかもな…

「まあ、名がなんであれ、南郷が戦人ってことは変わらんさ。
さあ、戦人と戦人が出会えばそこが戦場だ！！
楽しくやろうぜ！！」

「ああ、楽しくな。」

自然と口角が吊り上がる

心搏数も上がる。

制服の上着を脱ぎ捨てる。

こんなの邪魔だ

「ところで南郷。お前得物はいいのかい？」

「俺は拳法家。武器は拳足だけだ。」

そもそも使える武器なんて無いから。

「いいねえ。アンタ最高だ！！本気でいかせてもらおう！！」

ああ、芳香だ

強者の芳香だ

「来いッッ！！南郷海皇舐めるなよ！！」

「戦闘開始ッ！！」

鎧男の大声

太鼓の吠える音

… 始まった!!

「……………」

迂闊に近寄らない。

間合いを詰めない事には始まらないが、近寄らない。

力をはからないとな…

女性のウエストのような腕ってこんな感じだろうか。

腕力勝負はしない

… となると

戦う手段は限られる。

「オウツツ!!」

下からの振り上げツツ!!

膝を曲げて避けるツツ!!

「シャアツツ!!」

勢いを利用し回転しながらの一閃ツツ!!
はかるツツ!!

「ツハア!!」

掴む!!

手から悲鳴。

重いッッ!!

「吹き飛びなァッッ!!!!」

「んがッ!!」

槍をそのまま力ずくで振り回す!!

手が遠心力に負けて振り落とされるッッ

「んだッッ!!」

そのまま壁に叩きつけられた。

だがまだ雷銅は止まらない!!

「ハッハー!!」

ダッシュ攻撃!!

速さも叩きつける気が!!

「ラァッ!!」

「シッ!!」

屈んで避け足狙いの体当たり!!

倒す!!

「それは知ってたァ!!」

跳躍!!

それで躲された!!

「上え!!」

「!?!?」

上からの逆突き!!

槍の後ろの鉄の塊が降ってくる!!

「ッッ」

前回り受け身で逃げる!!

「良い動きだ!!楽しくなってきた!!」

「チッ…この馬鹿力が!!」

こいつ…夜叉。より強い!!

「まだいくぜ」

槍での斬ッ!!

「カツ!!」

只避ける!!

そして懐へッ!!

「オウッ!!」

裏拳！！左の裏拳！！

馬鹿めッ！！

とるッ！

よけて勢いが落ちる時を狙う！！

左腕をとる！！

右手で掴み投げる！！

左は顎へ！！

「ッガッ！！」

頭から床に叩きつける！！

左を外し、顔への下段突きッッ

骨と金属の衝突音

槍の柄で防ぎやがった！！

バックステップで間合いを開ける。

「ッハッ！！」

立ったか…スゲエよお前。

だけだよ

「あれだけ打ったら景色がドロドロじゃろっ」

あれは会心の投げ…

それで頭を打ったら相当キツイ。

人によつては死ぬだろう。

「っはー、はー、」

「幕の引き時だな…格好良くな」

構えて深く腰を落とす

正拳ッ!!

腹に拳が突き刺さり

吹き飛ぶ巨体

槍が手から落ちる音

「決着ッ!!」

…勝ったッッ!!…!!

「驚き申した。よもや素手で勝つとは…」

「スゲエだろ!」

「ああ、本当に強いな。南郷。」

「復活ハヤッ!!」

…こいつ人間?

「慶。お主の負け、素直に認めよ。」

「もう認めてる。槍も落としちまったしな。」

やっぱこいつ最高！！
メツチャ気持ち良い奴だ！！

「あ、スマン。少し聞きたい事があるんだけどいいか？」
一刀、そしてこの世界の情報を集める。
こいつなら嘘はつかない。

「ああ、いいぜ。なんだって聞いてくれ。」

「先ずここ何処だ？」

「益州。永安の白帝城だ」

どこ？

「何それ？」

え？マジで分かん。
どこ？

荷物の中に地理の教材あるか？
あった。

「益州…無いぞ」

「何だいその本は？」

「え？地図帳だけだ」

「なんだいこの絵は？」

「世界地図」

…なんで知らんの？

なんかスッゲー穴が開くほど見てる。

「益州か…中国っぽいな」

「中国？どこだい？」

は？

え、どういうこと？

「中国知らんってアウトだろ。アメリカ知らんぐらいやばいぞ。」

「あめりか？あうと？」

え？

何か凄い食い違いしてるような？

地図帳めくり中国のページへ何だ？何が起きてる！？

「忠、慶いるか？交替だ」

「うつせー邪魔だ！！」

「何事だ？」

誰か来たが気にしない！！

あつた！！

このページ！！

「これ！！中国コレ！！」

「ここらが益州だ」

ハイ？

「…慶は何をしている？」

「あれの相手にござる。」

外の声は気にしない。

どゆこと？

「この国の名前って何？」

「「漢」「」

なにそれ？

「すみません。もう一回…」

「「漢」「」

「あ、聞き間違いじゃなかったのね。」

………

行き詰まった…

「なあ、あんたスマンこっちからも聞きたい事が出来た。」

「？何？」

「あんた、天の御遣いなのかい？」

…なにそれ。

VS雷銅！……ここは益州、白帝城（後書き）

…原作キャラそろそろ出さないと…

く旅立ちく一刀殺るため三千里（前書き）

やっと旅立ち。

合流するのはいつやら…

く旅立ちく一刀殺るため三千里

SIDE 仙刀

… 大体理解した。

漢〓中国らしい。

初めて知った。

そして俺だが今の立場が

外国人そして…

異世界人、且つ未来人

… 誰か憂鬱な奴がいんの？

涼宮。ルヒ的な奴が。

氣を超能力としたら俺一人でS。S団三人分だ。
ちなみに外国人、未来人はバレタ。

一刀の荷物のなかにあつた世界史のせいだ。
その結果

「漢が滅びるねえ。まあ、兆候はすでにあるな。」

「左様。最早漢は末期にござる。」

「ふん、曹魏、孫呉、蜀漢の三国か…」

この国の歴史ばらしちゃった。テヘッ♪

… 我ながらムカついた

で、あと聞いたのが真名。
それがもう、大変でさ

「そついや、雷銅。お前さっきから慶って呼ばれてるけど何？
あだ名？」

「「「！」「」」」

「あれ？悪いことした？俺？」

なんかヤバい雰囲気…

「南郷殿。それは真名にごさる。」

マナ？

あー、デュエ。でクリーチャー召喚に支払うアレ？

「真名とは命と等しいものだ。勝手に呼んだら斬られようと文句は
言えぬ。」

かなりヤベエ！！
何それ怖い。

「雷銅ゴメン！！ほんとすいませんでした！！」

秘技！バク宙土下座！！
全身全霊で謝る。

…ゴメン。

本当に良い奴なのに…こんな事しちゃって…

「……………」

無言

ヤバイメツチャ怒ってる。

「ごめんなさい。本当ごめんなさい」

「？何謝ってたんだ？」

「「ハア？」」

「俺を無手で下す程の漢。アンタの事気に入ったあ！！」

「は？」

あれ？何かおかしい。

「アンタに真名を預ける前に呼ばれた。むしろ光栄。首を取る気は毛頭無い！！」

「お前何言ってるの！？」

こいつらの説明と俺のバク宙を返せ！！

「あべこべな形だが俺の真名を受け取って欲しい。
俺の真名は慶>ケイ<！！！！よろしく頼む。」

「え？命と等しいんじゃないの！？」

「ああ。あんたじゃ無ければ叩き斬っている。たが…」

「だが？」

「あんたが異国の人間だと知って予想はついていた。可能性の一つが現実になっただけさ」

「……………」

デカイ…器がデカイ。

「アンタには真名が無いんだろう？返す必要も無いさ。」

「…仙刀だ。」

「うん？」

「俺のダチは名前で呼ぶ。

…仙刀と呼んでくれ。」

「ああ！！」

てな具合に友情が芽生えた。
戦って勝って仲間が増える。
どこの週間少年ジャン。？

そして他にも…

「仙刀殿。用意はできてござるか？」

「ん。大丈夫」

この侍言葉が

張任

真名が忠>チュウ<

あの後、慶がそこまで認める漢なら
とか言って預けてくれた。

真名って重いんだよね？

俺の中で真名のインフレがヤバイ。

で、もう一人。

「何をしている。買い物に行くのだ…早くしろ。」

途中から来たコイツ

名前を冷苞

真名を仁>ジン<

身長は俺よりちょっと高い。

180センチぐらい？

外見は

黒髪で前髪をセンター分けして

後ろ髪は一本に首の辺りに纏め下げている。

なんか面が冷酷ってか、冷静っーか、冷の字が似合う。

ポケ。ンなら間違いなく、こおりタイプ
そんな感じ。

そして今、武器屋にいる。

慶が『素手だけじゃ危ないから』と提案したからだ。

確かに分かるけど…

絶対、武器なしの方が強いぜ俺は。

武闘家にどうのつるぎとか装備させたら攻撃力さがるじゃん。
それと同じ理屈だ。

「よう！！親父！！邪魔すんぜ！！」

「らっしやい」

「うわー、メツチャRPGっぽいわー。」

「オイッ」

「ヤバッ」

俺たちの間で決まった事がいくつかある。

？御遣いであることを隠す

これは占いが原因だ

カンロだったか、カイロだったかが言った占いの内容がかなり有名
になったからだ。

どうやら『天』がアウトらしい。

理由は… 忘れた。

？制服は着ない。

これまた占いで白き輝く衣とあつたのがマズイ。
制服がその条件にしくり当てはまつたからだ。
で、特定されるのを避けるためだつてさ。

？偽名を名乗る

これまた特定を避けるためだ。

まあ、偽名といつても

姓 南 名 郷 字 仙刀

となつた。

… 偽名？

？武器を持つ

これも占いのせいだ。

どんだけ占いに縛られるんだよ…

て、ワケで武器屋。
色々ある。

ひのきのぼう

こんぼう

どうのつるぎ

たびびとの服

皮のよろい

皮のたて

… これなんて最初の町？

割ってくださいと言わんばかりにある壺とタルから目を離す。

うまのふん。なんかありませんよ。

ほのかにかぐしい香なんか無いんだっ!!

今だけつまれ俺の鼻!!

ふと気付くと赤い宝箱。

「……………」

開けた方がいいのか？

いや、やったら泥棒だろ

しかし、あれだぞ。宝箱だぞ

ミ。ツクの可能性が…

駄菓子菓子ここまでドラ。エなんだ。

開けた方が…

「おい。」

「!?!?はいっ!?!」

急に店主に話し掛けられる

めっちゃビクッた…

「その宝箱は開けるなよ。いいか!!絶対の開けるなよ!!」

開けるということですね。わかります。

ご丁寧にダチヨウ倶楽部的流れまで。

…こりゃあ開けるべきでしょう

「すまんが一時、廁に行くから待ってる。いいか絶ッッッ対に開けるな」

「……………」

そう言つてどこかに行く店主。

「……………」

パカッ

「開けるなと言つたろぅが!!」

「戻るの早いなオイ!!!!」

俊足で戻つてきやがつた!!
ボ。トより早くね!?

「で、何これ？」

中に入つてたのは手袋。

ただのではない。

全部の指先に長い刃がついている。

てか、某海賊漫画で服にウ。コの絵がある、あの執事で海賊だった奴の武器っぽい

「何これ?いくら?」

「引き取ってくれるならそれで構わん。」

マジ？ラッキー

でも何で？

「それは…呪われた武器だ…」

「呪？あるわけねーだろ」

「いや、事実だ」

そう言つて店主はポツリポツリ語りだした。

「それは…俺が昔作つた武器だ…切れ味は最高。俺の最高傑作になる筈だつたんだ…」

俺は店主の言葉を茶化さず静かに聞いた。

「名前を『化猫』と言つんだ。

だからかもしれん。これは化けたんだ。

…呪の武器にな。

コレは今までに三回売れたんだ。」

「……………」

「だが一人目は抜刀した際に自分の足を斬り…」

「待てや」

「何だ？」

「どう考えても買った奴の不注意じゃねえか!!」

「いや、呪だ」

「……………」

「話を続けるぞ。二人目は汗を拭おうとして腕を切り」

「おい待て!! また不注意だろ!!」

「いや、呪だ」

「呪すきだな!!」

「三人目は…」

「話続けんなアアア!!!!」

「上官との訓練で上官の髪の毛を剃り落とし
それが原因で惚れた女にふられ、その腹いせに軍をクビにされたんだ。」

「どこが呪!? てか、もう面倒臭いから、これ貰っていくからな!!」

「待て!! 今、それに続く話を考えているんだ!!」

「じゃあ呪とか嘘八百じゃねーか!!!!!!」

「だって呪とかあったりすると格好いいじゃん!!」

「黙れ、髭面厨ニイイイ!!!!!!」

「ギャアアアア!!」

「おう、仙刀。決まったかい？」

「うん」

「じゃあ金……」

「タダだよ。」

「は？」

「タダ」

「……ま、それでいいか」

翌日

「本当にお前らも来んの？」

「ああ、こつちに居た所で暇だからな。」

「左様にござる。劉璋でなく仙刀殿の力になるつ。」

「フツ…貴様の目指すもの見届けさせてもらおう。」

結局全員ついてくるつてさ。

男四人の旅…

最悪以外の何物でもない。

ムサいから。ガチで。

「さあ、仙刀。先ずは真つすぐ北に行くぜ。」

「北？何で？」

さつさと一刀を抹殺したいのに…

「ああ、涼州に行って馬を何とかしないとな」

「俺としてはさつさと虫けらと合流したいんだが…」

「なれど、急がば回れとの言葉もござる。」

「馬をさつさと手にいれるぞ。無駄口叩く暇など無い。」

一刀との合流。

この旅の目的は皆、受け入れてくれた。

ちよつと回り道だけどすぐ行くから待ってるよ。

「そつか…じゃあ行くか!!」

「おう!!」「ハッ!!」「行くぞ」

まともれよ…

SIDE 黄忠&嚴顔

「桔梗様、紫苑様お手紙が来ております。」

「なんじゃ？焰耶みせよ」

「ええ、誰からかしらね」

「はいッ！こちらです。」

「どれどれ」

「ふうん」

「誰からですか？」

「焰耶の兄弟子からじゃ。『再見』とデカデカ書いてよこしおったわい」

馬鹿弟子が。碌に挨拶も出来んのか。

「兄弟子？」

「ふふっ『恩に報いずに去る不孝な弟子をお許し下さい』ね。相変
わらずねあの子は」

大丈夫。あなたは私の自慢の弟子よ。

「しかし、行ってもうたか」

「そうですわね…」

行ってくるがよい、慶。

行っでらっしゃい、忠。

く旅立ちく一刀殺るため三千里（後書き）

簡単キャラ紹介

名 雷銅

真名 慶>ケイ<

中国読みだと>チン<になりますが
ケイでお願いします。

イメージ 戦国無双の前田慶次

名 張任

真名 忠>チュウ<

イメージ 戦国無双の本多忠勝

名 冷苞

真名 仁>ジン<

イメージ 三国無双の曹丕

そろそろ原作キャラが多くなります。

これからもこの駄文をよろしくお願いします。

南郷流格闘術奥義亜空間殺法（前書き）

ちよつとした番外です。

南郷流格闘術奥義亜空間殺法

SIDE 一刀

「今日は此処で野宿となります。」

「…ゴメン。皆」

「うん。悪いのはご主人さまじゃないよ。」

本来、村に辿り着く筈だったが着かずに野宿。
その原因は…

「うん。よろしく三人とも」

桃園の誓いを生で見れた。
凄いな。本当に三国志の世界なんだな。

そして三人から真名を預かった。

…問題はそこから公孫贇のいる所に向かう途中だ。

「そういえばご主人さまともう一人、御遣い様がいるんだよね？どんな人が知ってる？」

「たしかに、気になるのだ！！」

無邪気にあれについて聞いてくる桃香と鈴々。

…どうする？オブラートに包んで説明するか…

「外道、人間のクズ。世のため人のため死ねばいいと思う。」

「「はい？」」

うん。上手く包んだ。

「えーと、ごめん。もう一回言ってくれないかな？」

「外道、人間の最低辺。さっさと死ね。」

「変わってない！？」

マズイ。ちよつと本音がでた。

「…すいませんどこか良いところ「微塵もない」…そうですか…」

愛紗が控えめに聞いてきたけど、あいつの評価は変わらない。
仙刀のいいところより、Gのいいところの方が絶対多い。

「な、何があつたの？」

「此処に来る前に色々。」

資料館のことやら、部活のこと、普段の生活の事を話した。したら、桃香は

『…無い。そんな人がいるなんて…』
と青ざめた顔で呟き

愛紗は

『… 賊徒の方がまだ真人間ですね…』
と賊に対する評価が軽くアップ
まあ、人類最低辺と比べたら相対的にそうなる。

で、一番重傷なのが鈴々。

『……………（ガタガタガタガタ）』

…無言。あの明るい鈴々がただ震えていた。

「まあ、これはまともな方で…」

「「「え？これ以上があるの！？」」「」」

うん。俺だつて信じたくないよ。
でもあるんだよ。

「でも、ご主人さま。」

「うん？」

いつの間にか復活した桃香。
意外とメンタル強いのか？

「なんか、その人のこと話すとき楽しそうだね」

……………

「そう?。」

「うん。なんか明るい感じがする」

「確かにそうですね。」

「楽しそうだったのだ!」

そうか?

かなりあいつを殴りたくなっただけだな…

「ま、楽しいこともあったな。」

「だから、いい人でしょ!!…多分」

「あ、やっぱりそこらの信用は無いんだ」

「まあ、話を聞く限り鬼畜ですから」

愛紗も笑う余裕ができてきたのか、笑ってる。

「仕方がないことなのだ!」

あんな状態だった鈴々も完全復活し笑顔。
やっぱり桃香には不思議な力があるんだな。

同時に自分の中を見抜かれたような恥ずかしさもあって…誤魔化すようにポケットに手を入れた。

「ん？」

気付かなかったけど何かポケットに入ってる。

「何が？」

取り出すとラムネ菓子みたいなモノが入ってるケース。

表面に『大丈夫！！頑張れ！！』と
見覚えある馬鹿の字。

「何見てるの？」

「仙刀…。もう一人の方からのもらい物だな。」

いつ、もらったのか分からない。

けどその文字は素直に嬉しい。

…ちよつとぐらい、いいとこ話しておくか。

「なんて書いてあるのか分からないけど、
その人が実はいい人って何となく分かるよ」
今、ご主人さまとっても優しい顔してるもん」

「…桃香。この菓子いる？」

「別に良いよ。ご主人さまのものだもん。」

「いや、感謝の気持ちだからもらってくれないかな。」

「じゃあ、それなら」

ハコを開けまずは桃香の手に一粒
当然二人にもあげる。
でも、まずは桃香に。

そして地獄の幕が開いた。
だって仙刀だ。
マトモな物が入ってなかった。

桃香の手に落ちる筈だった白いラムネ
だが実際は
茶色いなにか
何で？

「あ!!」

止める間もなく桃香が飲んだ。
嫌な予感…

「臭い!!臭いよコレ!!何!?!何なの!?!」

桃香の手に落ちたアレ
匂いで分かった

『正。丸』だ。

そして吐き出しても尚、残る異臭。
川にいつて濯いでも匂いが消えない。
あのバカの細工があるんだろう。

そして、その結果、野宿。

「「「許さん！！！！南郷仙刀！！！！」」」
その時、俺たちの心は物凄く一つだった。

南郷流格闘術奥義亜空間殺法（後書き）

この。露丸トラップはリアルでやりました。

教室内に入りたく無くなりました。

く涼州へく 嘘を吐いてはいけません（前書き）

先ずはここ。

予想通りの人たちが出ます。

く涼州へく 嘘を吐いてはいけません

SIDE???

「ほら、月こつちよ」

「へう…待ってよ詠ちゃん。ちょっと疲れて…」

最近、領内に賊が増えた。

それで月と僕の仕事が増えた。

…それだけならいいんだけど最近、月は頑張りすぎて休んでないみたい…。

だから僕は月を外に連れていく事にした。

選んだのはこの森。

木が適度に生えているから、陰と光が丁度良い。

森の周りは霞とその部隊が守っているから賊の心配は無く、虎がいたなんて報告もない。

「月ここ。座って」

「ふう、良いところだね詠ちゃん。」

森林浴。

これなら月が休めるし、気分転換になる。

『……………』

と思った矢先に影が差す。
後ろを見ると

「「キヤアアア!!」」
居ないはずの虎がいた。

SIDE 仙刀

旅に出たはいいが困難に早速打ちあつた。
…食糧難だ
だから昨夜…

『グルアアア!!』

「あーもう、うっさい!!」

『グオオオ!!』

狙いは首!!

首の上で座禅をくむ!!

『グルオオオ!!』

とつた!!

「転蓮華」

一瞬ドヤ顔。

そして体を傾けるッ!!

骨の碎ける音

首のまわりを一回転ッッ！！！！！！
戻ったら下段突きッッ！！！！！！

「突きイイイ！！」

そうして俺は虎を狩った。

「…素手で虎を殺すとか、あんた本当に人間かい？」

「当たり前だろ。愚。独歩もやったんだからよ。」

「誰にござるか？」

「こつちの話だ」

夜叉。、金獅子と比べたら虎なんて可愛いもんだ。

「私としてはあの技の方が気になるが」

「転蓮華か？」

転蓮華>てんれんげ<

界皇様から教わった中国拳法の技の一つ
相手の首の骨を破壊する技だ。

「…恐ろしい技だな…」

まあ、今の時代なら治せないからな
いや、華陀ならいけるか？

『ゴットヴェイダー!!』』

華陀とは旅の途中、漢中で知り合った。

ノリで仲良くなり氣で他人を治す事を教わった。

『ゴッドヴェイドウ』で治療が出来る事と言った時何故か白い目をされた。

仁に至っては0ケルビンの視線だったからな…

「で、この虎どうすんだ？」

「え？食わんの？」

「あんた猪も狩ったじゃねえか。誰がそんな食ったよ。」

「慶、忠、仁」

「…否定できぬ」

ま、虎は明日の飯。

楽できたから良しとしよう。

で翌朝、虎を担いでいたら

『キャアアアア!!』

悲鳴。

音源の方に女が二人倒れてた。

…俺のせい？

『月うち！！詠！！何があつたんやー！！』

遠くから声

「仙刀。」

仁から話かけられ意識を引き戻す。

「身なりからしてこの二人はこの州の重鎮、富豪である可能性が高い。」

気絶させたとあらば厄介だ。誤魔化せ。」

仁からのアドバイス。

ここは素直に受け取る。

「！？虎！？何で此処にいるんや！？」

来たのは関西弁の女。

…強い。そして速い。

「アンタ等、此処で何しとるんや？」

殺気が滲んでる

そしてさり気なく倒れてる二人の盾になってる。

…関係者か

「ああ…実は…」

「仙刀さん。危ない所をお救い頂きありがとうございます」

「月を助けてくれた事に対しては礼を言っわ」

「仙ちーのお陰やな!!」

「……………ありがとう」

「月殿救助の礼をする。ありがとうございます。と恋殿は仰っているのですぞ!!」

「貴様が居なければ董卓様は無事ではなかった。礼を言っ」

ざ、罪悪感がアアア!!

あの後、仁にも協力してもらって上手く誤魔化した。その結果
犯人↓命の恩人
となり、今は城で感謝されている。

だからさ…

「ええ、本当にありがとうございます。貴男は命の恩人です。」

罪悪感がヤバイ!!

だってこの娘メツチャ良い笑顔してる！！

疑ってないもん！！全く！！

あ！！何か胸の中に黒いものが！！

取ってエ！！この黒いのとってエエエエ！！

「心からの礼。嬉しく思います。」

仁！？なんでお前そんな堂々としてんの！？

嘘の七割お前の口からだぞ！！

おい！！笑うな！！

何良い奴の笑顔してんの！？

「だが、私達には旅の目的があります。

願わくばその旅のための馬を頂けませんか？」

え？ここで頼むの？

図々しくない？

「はい。そんなものでよろしいのなら」

止めてエ！！

そのキラキラした笑顔！！

頼むからそんな顔で見ないで！！

この汚れた俺を！！

申し訳なさがヤバいから！！

「見た所、四人いらつしゃるので四頭でよろしいですか？」

ホント止めてエエエ！！

「…何してるのよ南郷は？」

「……………びよーき？」

うアアアア！！

俺の所為なのに！俺の所為なのにイイイイ！！

申し訳なさから額を叩きまくる。

月、その優しさが痛いよ…

俺の心に刺さるんだ…

この娘が起きたら、霞が事情を説明。

そして感謝の印として月、詠、霞から真名をもらった。

で、月はかなりの有名な人で権力者らしい。

名前だけで慶と忠は驚いていた。

大守ってやつらしいけど意味は知らない。

…聞いたらマズイ気がしたからな…

で、城に来てここ…玉座の間だったかに招かれた。

そこで、赤毛の娘と子供、恋と音々音から真名をもらった。

華雄は結婚相手にしか言わないってさ

で、その赤毛が呂布。

…かなり強い

音々音はこの国最強だ。と言ってた。

反論できなかった。

俺は界皇様だと思う。

でも、恋が相手ならどっちが強いかなんて分からない

でだ。

その時点で申し訳なさがマックス。

しかし、仁が

『真実話したら始末する』

的なビーム出したから話せず、

ズルズルときたらこの流れ

…ゴメンよ、月。

俺は弱いんだ…

「しかし、仙ちーって強いんやな！！虎を素手で叩き殺すなんて初めて聞いたでウチ！！」

「別に他にも居ると思うけど…」

愚地。歩とか範馬。次郎とか範。刃牙とか花。薫とか…

ダメだ。グラップラーでしたらアウトだ。

「謙虚やなー。そないな人間そう居るわけないやろ。せやから…」

あ。この流れ…

「ウチと戦ってくれへん？」

ほら。

「別に問題な「待て！！霞！！私も目を付けていたのだぞ！！」」
………恋も「…は？」

あれ？まさかの展開？

「ほら！！アンタたち！！南郷は僕達の恩人なんだからあんまり迷惑な事しない！！」

「いや、少しぐらいなら大丈夫だ」

申し訳なさがあるから、向こうからの提案も飲む。
見れば三人とも強そうだ。
少なくとも見かけ倒しは無い。

「なら、三人共や。」

おい待てや

「もてるねえ仙刀」

「ヤダよこんなモテ期。」

どこか呑気な慶。

俺にそんな呑気にいられる余裕は無い！！

美少女三人に取り合われるシチュエーション。ハーレム展開だ。
戦いが無ければな！！

心の中で愚痴つても始まらない。
話は三人ともやるになって、今は順番決めしてる。
なんとか一人に……！！

（仁頼む！！）

目線でメッセージを送る。

慶と忠は煽る気がしたから頼まない。

（ふん。まあ、良い）

薄く笑ってくれた仁。

…良かった！通じた！！

「話し合いの折にすまんが、私達には旅がある。
それ故、一人に決めてもらいたい。」

仁ナイス！！

心の中でガッツポーズ！！
強い奴ら三連続はヤバいんだ

「くじで決めるのが良いだろう。すまぬが用意してもらえぬか？」
「あ、はい。では…」

「月は座ってて。僕が取りに行くから」

「えー、そないな事せんでええやん」

「……………やりたい」

取り敢えず一人になるっぽい。

流石仁！！

頼れる！！

「持って来たわよ」

「すまん」

仁が受け取り、筆をとる。

墨がついてるのがアタリだろう。

そしてアタリを一本、二本、三本

「待て」

「何だ？文句でもあるのか？」

別に変な事はないように聞き返す仁。

強心臓にも程がある。

「全部アタリじゃねえか！！」

「だからどうした」

「あの視線の意味分かってる！？」

小声でのやりとり

それで叫ぶという器用な事をやってのける。

「大体貴様はさっきから狼狽え過ぎだ。

堂々としろ。しないならこれで三連戦にする。」

「だって申し訳なさが…」

「労せず馬が手に入るのだ。

その程度気にする必要あるまい。」

「悪人だな！！お前！！」

こんな外道だったのかコイツ……！！

「なあ。くじに外れたら俺達の相手をしてくれないかい？」

「左様。仙刀殿がいずれであろうと、天下に名高き張文遠、呂奉先、華雄が相手に不足はござらん！！」

「ああ！！戦人としての血がたぎるってもんだあ！！」

結局三戦はするらしい。

まあ、軽い恩返しって事にしといて、罪悪感を減らそう。

「ふん。戦人どもが……」

「では鍛練所に案内しましょう」

……こいつらのどれかが相手。

一丁頑張るか

く涼州へく 嘘を吐いてはいけません（後書き）

再び戦闘パートへ

…どうしょ

V S 霞！！　この世界で生きるための覚悟

くじの結果、仕合いは

一戦目　慶 V S 恋

二戦目　俺 V S 霞

三戦目　忠 V S 華雄

となった。

審判は仁

月、詠、音々音は観客だ。

「まさか人中の呂布が相手なんてな…」

「…有名なのか？」

「知らないのか！？あの呂布だぜ！？」

「全く知らん。強いと分かるだけ。」

「アンタもう少し世の中知った方がいいぜ。説明するから聞きな。」

呆れたのだろう。

それでも説明してくれるのは有り難い。

「呂布。恋は先の戦で黄巾賊三万を一騎で潰したんだ。」

ハア？三万！？

「嘘だろ…」

「事実だ。だから涼州の賊は少ないんだ。他の州なんて酷いもんだ」
そう言つて慶は他の州の噂も話してくれた。

今の世の中は政治腐敗が進み、荒れに荒れてる。

東では放火、略奪、殺人は日常茶飯事。

都も治安が悪く浮浪者、孤児が多く餓死する人間がいる始末。

…なのに国のトップは自分だけ考え私腹をこやしている。

酷い話だ。

こんな言葉でしか言えない自分の語彙力がイヤになる。

「そつえばだアンタに人を斬る覚悟はあるかい？」

唐突な質問。…殺せるかつてことか？

「…無えよ。…慶お前はあるのか？」

当たり前だ。

俺は一般人。

…あるわけ無い

人を殺すなんてしたくない。

「あるさ。殺さないで殺される。
それが今の世だ。」

俺の質問に答える慶。

顔には普段の明るさは無い。

「俺も、忠も、仁も人を斬った。」

衝撃だった。

仲良くなったのが人殺し。

何も感じない方がおかしい。

「怖いとか、辛いとか無いのか？」

「そりゃあ、あるに決まってる。けどだよ……」

話を一旦きり呼吸音

「戦う力のある奴ってのは、力の無え民を守らないといけねえんだ。
アンタには力がある。」

…まあ、殺す覚悟は後で決めな。
今はこの仕合いを楽しもうぜ」

話を変え、普段の笑顔になる慶

…気を遣ってくれたなんてこと言われなくても分かる。
…覚悟、守る…か

「一戦目！！慶対恋！！中央！！」

真名は俺達も教えた。

まあ、俺は外国人と教えたただけだ。

…なんか偽名使わない気がしてきた。

…と、関係ない事考えている場合じゃない。
始まる。

慶の相手は、三万人に勝った奴だ。強いに決まってる。
この世界の女の強さ。

ゆっくり見物しよう

「恋どのー!! そんな奴、一撃でやってしまつのですー!!」

「始め!!」

仕合いは一瞬だった。

慶の払い上げの一撃を恋が受ける。
そして、パワー勝負。

それで慶が負けた。

恋の腕は普通の娘と大して変わらないにも関わらずだ。
信じられない。

そのあとの連撃にやられて負けた。
パワー、スピード共に超一流。

…界皇様でもどうなるか分からない。

「仙刀殿。あれが呂布にござる。」

「…すげえな」

「ああ、手に雷が落ちたみたいだ。痺れてやがる」

力の強さは

俺<慶だ。それは間違いない。

俺対恋でパワー勝負はどうなるかなんて考えたくない

「次!! 仙刀対霞!! 中央!!」

俺の番だ。集中!!

コイツも強い女!!

強い女と戦うのは初めてだ。

なんか、殴っちゃいけないって感じるけど…

いや、実際マズイ

顔なんて殴ったら焼き土下座モノの気がする。

なら、狙いは

掌底でおっぱ…胸狙いじゃなくて投げで自然にバストタッチじゃなくて横に回って袴のスキ間から覗きた…って何考えている!!
うがアアアア!!

「…仙ちー、何してんねん」

「放っておけ…」

「せやけど…」

霞がどこからかハリセンを取り出す。

「いつまでやっとなねん!!」

「アダア!!」

スパーンと小気味いい音。

取り敢えず目が覚めた

つてなんか霞…

「なにそのハリセン!? 体の一部!?!」

「んなわけあるかい!？」

再び快音

「だってメツチャ似合ってる!!!てか、それが本体!？」

「なんやバレてもうたんか…実は…て、なわけあるかい!?!」

「アブシ!?!」

ノリ突っ込み!？」

コイツは本物だ!?!」

「…アンタたち漫才でもやったら?」

「するわけないやろ!?!」

「そうだ!!お笑いの世界は厳しいんだ!?!」

「突っ込むところおかしいやろ!?!」

四発目。そろそろ痛い。

「ああ、もう。バカやっとなんで始めるで」

「え!?!ハリセン捨てるの!?!武器それじゃないの!?!」

「ドコの世界にハリセンで戦う奴がいるんや!?!」

どこかにいるさ

「…始めていいか？」

「ええよ。始めて」

「えー、もうちょいイジリたい」

「もうええわ！！」

「どうも、ありがとございましたー…ノレよ」

「なんや！？ウチが悪いん！？」

「締め挨拶はしないとダメだろ。」

「なんや正論なんが腹立つわ！！」

あー楽しかった。

「待てや！！何一人帰ろうとしとんねん！？」

「ネタが終わったら舞台から下がらねーとダメだろ」

「漫才しとらんわ！！」

「…アンタたちやっぱり向いてるわよ」

気が付いたら、月と詠が苦笑いしている。

ふざけすぎたな

「さて、一仕事やったし始めるか」

「やっとや…ホンマ長かったで…」

「本当にな。約束が今から三年前…。誰のせいだ」

「おまえや！！てか、そんな長くないわ！！」

ひとしきり突っ込み終わり額に手をあてる霞
素晴らしい突っ込み要員だ。

「吉本に履歴書、勝手に送っておくか…」

「やめい！！何処か知らんけどやめいや！！」

突っ込みは条件反射。
実に好い

でも…ふざけるのはもう終わり

「じゃっ始めるか」

呼吸を整える

「やっとやる気になったかい。」

霞も武器を構える。
薙刀みたいな武器だ。

リーチは完全に負けてる。

「仙ちー。素手やけどええの？武器なら貸すで？」

「別にいい。俺は拳法家。武器はこの体！！」

「…ウチもなめられたもんやな…」

そないなこと二度と言えへんようしたるわ」

「さつさとこいや！！」

「なら…いくでっ！！」

一撃ッ！！速い！！

強烈な突きッ！！

ギリギリで躲す

次はこっち！！

踏み込んで正拳ッッ

？居なッ？

「横やアアア！！」

横から柄の打撃！！

チッ！

辛うじて左でとる！！

あれ？な…

「ゲガツ!!」

軌道変えやがったのか!!
ぬかった!!

「まだいくで!!」

連撃ッ!!息のつかない連撃ッ!!

チッ!!これは使う気無かったのに!!
氣で体を強化する!!

…だけど全身強化まで、できない。
せいぜい一部分だ。
なら強くするのは!!

「す、すごい…」

「霞の連撃をあそこまで弾くなんて…」

「……………せんちー、守り堅い」

「むむっ!!あのようにするとは…」

「前羽の構えにござるな」

「「「「前羽?」「」「」」」

「左様。仙刀殿が用いる武道の守りの型にござる。
その守りの堅きこと、語るにおよばん。」

「ああ。あれは思いだしたくねえな…。
自分の突きが全部弾かれるんだ。
自信無くすぜ」

強くしたのは『動体視力』
これで守って、隙を作るしかない！！

「なんや、仙ちー見えとるやん！！
なら、もつとはようするでっ！！」

まだ上があるのか！？
防ぐしかねえ！！

ただ必死に耐える。
さばききれず、何発も当たる。
なんつー速さだ！！

「おまつ！速くなるなら
『まさか人間相手にこれを取るなんてな…』
とかいれるや！！」

「何無茶いうとんねん！！」

戦いでも突っ込みを忘れないその姿…
目に焼き付けよう。

…サラシごと

「何考えとんねん！！」

上半身への袈裟切りか！！
手を上にやる！！弾く！！

「下やアア!!」

「マズッ!!」

ヤバい!!上だけに集中しすぎた!!
フェイントに反応しきれない!!

「ッツア!!」

脛への強打。
畜生、見えねえ。
本当に速い。

こっちは汗が尋常じゃない
なのに霞は余裕の表情。
…コイツ…!!

「ハッ…ハッ…」

「なんや、もうしまいかいな？」

「まさか…な」

服が重い。
かなり汗を吸っている。
…邪魔だ。

「な、何しとんねん…」

こっちに来てから履いてる袴。
その裾に手を掛ける。

縫い代の軋む音。
…いける

服が裂ける音がする
同時に体が軽くなる。

「さ、仕切り直しだ」

服を切り裂いて脱ぐ。
今は完全にトランクス一枚だ

「なっ!?!」

「へう…//」

「正気かいな!?!何考えとんねん!?!//」

「何だ?顔赤いぞ。このムツリスケベ」

「うつさいわ!?!露出狂!?!」

「だからどうした!?!」

「開き直るなや!?!」

そう言って突っ込んでくる霞。
まだ顔が赤い。

「どうせ弾いても隙が無いなら…避ける必要なし!!」

そう。半裸になったのには意味がある
手を高く上げ、守らない。

「侠客立ち>おとこだちく!!」

…守り切れないなら、避けず、弾かずただ攻めれば勝てる!!」

少なくともさつきよりは!

「メチャクチャやな…」

「だろ？」

「うらぁ!!」

上からの突き!!

「ちいつ!!」

防がれる!!

「ウチもいくで!!」

再び連撃!!

避けない!! 当たり続ける!!
イタイツ!!

「ツツアア!!」

握力×体重×スピード〃

破壊力！！

「狙いマル分かりや！！」

防がれる！でも関係無い！！

「アア！！」

そのまま振りぬく！！
霞が浮く！！

「っ！！と。」

しかし上手く着地。
ダメージ無しかよ…
でも、

「ッハアアア！！」

追撃！！

絶対一発はやり返す！！

「なめんなやアアア！！」

横薙ぎ！！

コレだ！！

「ッシャアッ！！」

当たる瞬間に浮く！！
柄を軸に一回転ッッ！！

「っらあ！！」

「なっ！？」

側転の形での蹴り

それは吸い込まれるように決まった

「っな……」

倒れる霞

それを見て俺の意識は旅立った。

「……ん？」

「あ、起きましたね」

「あんた気が付くの早いわね……」

「まあ打たれ強さぐらいしか、自慢すること無いからな……」

なんか情けないな。この言葉…

「を？仙ちー起きたんやな」

「もう霞復活してたのかよ…」

この世界の人、復活早くない？
ホ。ミ使えんの？

「ホンマ素手相手に負けるなんて思わんかったで…
仙ちー強いで。かなり」

「ありがとう」

真っすぐに言ってくれる霞。
顔が赤くなる

… あんま素直に言う奴いないからな

「なんや？顔真っ赤やで？
何考えてん？このムツリ」

「なんでそうなの！？仕返し！？」

「仙ちーずっとウチの胸、見とったやん」

「ずっとじゃない！！」

「ならちよっとは見てたんやな」

「んな!？」

バレテル!？何で!？

「いやそんな…」

「ええよ。別に仙ちーなら気にせえへんよ」

はい？え？ちょっと待ってアタマが追い付かない。

「柄…亜の…干つ支……」

「何やってんねん」

悪戯っぽく笑う霞
…ハメラレタ!？

「お前ええ!!一瞬甘い展開期待したじゃねえか!!」

「何や？何期待したんや？
言うてみい？」

「何でそんな追撃すんの!？」

「何もないで。
ちよっち仕合いでのヤツやり返したろ
なんて全然おもうとらんで」

「確信犯じゃねえか!!」

「仙刀殿。起き申したか」

なんてやってたら忠が帰ってきた。
アレ？

「あれ？忠、仕合いは？勝った？」

「うむ。危のうござった」

「なんや華雄。負けよったんかい」

「うるさい！！次は負けん！！」

ま、これで全部の仕合いが終わった。

…同時に気になることもある。

「なあ霞、華雄。お前たち恋に勝ったことある？」

「ウチも華雄もないで。

…恋は別格や」

恋の強さだ。

俺は辛うじて霞と相討ち
そして恋はそのずっと上。

…目標ができた。

「皆さん。馬の用意ができました。」

月からの言葉でまた罪悪感が…

「こちらでも良馬を選ばさせて頂きました。
どうぞお乗り下さい」

ニコツと笑う月

頼む…俺を…見ないで…

「そろそろ出るぞ」

「はい！また近くにいらしたらぜひともお越しく下さい！！」

仁の出発の合図。

行くか

月達と別れまた旅へ

目的は東。

涼州から出ると賊に合う可能性が高い

『殺す覚悟』が必要になる。

そして…こんなに早く必要になるなんて思わなかった…

人殺し（前書き）

なんでもこうなった…
早くふざけてる展開にしたい…

人殺し

SIDE 仙刀

「……………」

野宿。しかし、普段と違う

「仙刀。時間だ」

「……慶。いやな予感がする。」

誰かいるような感じだ。
というより……いる。

「武器つけときな」

「…虎かもしれないだろ」

「残念ながら賊だ……」

残酷な宣告。

俺だつて普段と違うなんて分かつてる
…でも人じゃない可能性に縋りたかった。

「きましたな」

いつの間に起きてた忠。
仁も起きている。

「いくぞ」

慶、忠は槍を

仁は普段は鎖鎌だが今は剣を構える。

「おい！！相手は人間だぞ！！
…本当に殺す気か！？」

「しないなら死ぬぞ」

確かに殺らなきゃ殺られる。
そんなの分かってる。

「覚悟が無いなら下がれ。
…行くぞ」

茂みに三人とも入る。

間髪入れずに

人の肉が切れ、血が出る音が聞こえる。
…嘘だろ…

「おい。こつちにまだいやがるぜ…」

「！？」

がらの悪い男。

手には剣。

火の光を反射し不気味に光っている。

手に化猫。

あの武器はつけてある。

武器同士で…いや、殺し合い自体初めてだ。
手が震える。

「ヘッ…震えてやがる。

アンタに恨みは無いが、殺して身ぐるみ剥ぐか…」

来る!!

怖い!!

「ヒイツ!!」

高い金属音。

本当に…!!

「っらぁ!!」

ッ!!

そのまま押され木に叩き付けられるッ
殺されっ!!

「ウワアア!!来るなアア!!」

左手を突き出す。

…脅しのつもりだった。

鈍い音。赤い何かが刃に垂れる。

首の無い体。

…マサ…力…

「あ…ああああ…！」

倒れる賊

…殺した？俺が！？

「仙刀！！何…が…」

「これは…」

戻ってきた。

でも…

「…童貞を捨てたか…」

初めて殺したんだ…人を

「辛いかな」

落ち着いた。一応は
でも

殺した？誰が？俺が？

…震えが止まらない。
寒気が酷い。

火に当たってもダメだ

「貴様はいつまでも殺さないでいれる。
などの夢物語でも考えていたのか」

仁の言葉。
キツい

「人を殺したくないなら死ね。
甘い理想などいつまでも掲げるな。
…胸やけがする。」

……………

反論しない。
できない

「殺す覚悟が無いか？」

「…当たり前だろ」

なんとか出た声。
擦れている。

「私も慶も忠も常に貴様を守る余裕はない。
見ただろ。恋に負ける慶を…
強い者と戦えば貴様は邪魔になる。
生きたいなら戦え。
まだ覚悟が決まらないなら来い」

そう言って背中を向ける仁。
付いていった先には
死体

「う…げえっ…」

「吐くな。見る

私たちが斬った賊だ

これを斬らねばこれ以上の地獄ができる」

仁に無理矢理顔を上げられる。

止めろ…止めてくれ！！

「仙刀。

賊を斬れば民が助かる。これを言い訳にし「ざけんな！！」…」

声を荒げる。

いくらなんでも…

「人だぞ！！人殺すんだぞ！！
言い訳ですむか！！」

「人だと思っな。奴らは獣だ。
そう思え」

「んなこと「なら背負え」…」

ムリだろ…んなこと

「背負えるわけ「背負える。」…」

仁が肩を掴み真っすぐ話してくる。
目は逸らさない。

「重いなら私も背負う。」

貴様が割り切れるまでな……忠も慶もだ。」

「……………」

真つすぐな目。

本気で言ってる。

「だから、貴様は越えろ。
それまで頼れ。」

そう言つて肩から手を外す。

…ちよつと出来た気がする覚悟が。

「725!!726!!727!!」

結局寝れなかった。
でも、それでいい。
覚悟が鈍らない。

「仙刀。」

「ん？」

後ろには三人揃っている。
話すか…

「…できたよ覚悟。
腹くくった。」

「いいのかい？アンタが居た世界は知ってる。
戦が無い国だつてのは
辛くないかい？」

慶…ありがと。心配してくれて
でも…

「決めた。戦う。
俺はお前たちの力になる。
守って貰うだけではいたくない。
だけど…頼っていいか？
一人で人殺しを背負うのは辛いから。
本当に腹くくれるまで。」

「…当たり前だ」「」

「ありがと。本当にありがと…！！」

覚悟できた。

こいつらとなら大丈夫。

守る理由もできた。

俺はこいつらに死んで欲しく無いんだ。

ダチには死んで貰いたく無いんだ。

だから…戦う。

満ち足りた月の夜に（前書き）

初の女オリキャラ
原作キャラがない…

満ち足りた月の夜に

SIDE????

「ハア……」

雛里と朱里が此処を卒業。

淋しくなつたなあ……

で、暇そうにしてたら水鏡先生に頼まれて買い出し
軽いからいいんだけど……

雛里も朱里も仕官か……

私も良い君主見つけないとダメかな？

「つきや……いったあゝ」

他の事考えていたら、つまづいた……

『ガサツ……!』

「ひゃあ!？」

後ろから物音。賊!？

逃げなきゃ……!

「ツツ……!」

足に鋭い痛み

やだ……!こんな所で……!

だけど…そのあと来たのは…

「待てや今夜の晩飯イイイイ!!」

『ブヒイイ!!』

猪を追う草塗れの何かだった。

SIDE 仙刀

あのあと荊州つてとこに来た。

…賊も斬った。

けどあの夜みたいにはもうならない。

一番怖いのは分かっているから…

時間が経つにつれて覚悟が固まってきたのが分かる。
慶も良い面構えだと言ってくれた。

でも、やっぱり頼りは必要だ。

で、頼りっぱなしはやだから…

「止まりなさい!! その暴走猪!!」

食料調達。

コレしてる。

しかし…コイツ通り道狙っているな…!!

藪ばっか通りやがる!!

『ブヒイ!!』

「ベブ!!」

なんか罾が…足を引っ掛けるロープが…

『プギヤー!! (^皿^) m9』

バカにしたような鳴き声。
ちくせう。ムカつく

「…………猪の罾にかかる人なんているんですね…」

「キサマ!! 見ているな!!」

「しっかりと」

マジか…見られてたなんて…ハズイ

「…誰？」

そっぴやコイツ誰だ？
てか、あいつらは？

「他のこと考えていて転んで怪我とか…バカだろ」

「あなたに言われたくないです。猪の罠にかかったくせに」

怪我してた娘を送ることになった。

そして、その送り先で迷子になったアイツら見つけるまで、待っていても良いことになった。

「まったく…迷子だなんて…」

「何才ですか？」

「うるせー。必死で現実から目を逸らしてたんだ。」

痛いところくなー！！

今は怪我した娘を背負ってその娘の私塾とやらに向かっている。

この娘の見た目は

白い肌にさらりとした黒髪。

長さは背中ぐらいまである。

顔も整っていて可愛い

より美人という表現が正しいだろう。

背負う時、胸を触ったら殴るとか言ってたが正直、気にするほどな

「痛い痛い痛い！！髪掴むな！！」

「何か失礼な事、考えましたね…？」

「謝るからはなギヨあああ!!」

「考えていたんですね」

確かに柔らかいのはある!!
当たると嬉しいけどこれは割りに合わん!!

「ツツウ…。着いたぞ。」

なんとか痛みを耐えて家の前に着く。

…辛かった…

「すみません。中まで頼めますか？
足を怪我してるので…」

あ、そうだった

「そつえば名前何？
言わんと門、開かないでしょ？」

着いたはいいけど門には鍵が掛かっている。
中から開けてもらうしかないな。

「そうですね。」

私は除座と言います。」

「分かった。呼ぶわ

すいませーん!!誰かいますかー!!?
ジヨジヨって娘を連れてきましたー!!」

「除庶!!」

「空条。太郎ってやつですー!!」

「じょーしょー!!」

「ん。東。杖助ね」

「違アアう!!ああ、もう!!!!」

「お前なにみゃあああ!!」

「除庶だつて言つてんでしょ!!
人の話を聞きなさい!!」

急に俺を引き倒し、蹴り付ける除庶。
…足の怪我は!?

「おまつ!!」

ここまで連れてきたのに、これは無いんじゃないの!??」

「貴方への礼なんか蹴で十分です!!」

そう言つてストンピングを続ける除庶
だから足の怪我は!?

「オラオラオラオラオラオラオラオラ!!」

「ハヤッ!!何なの!?

お前スタンドでもいんの！？
ちよっ！！そこはらめええええ！！」

こいつ…人間辞めてるだろ…

「…白雪>はくしえく？」

門から人の声

助かった…

「すみません。遅れました、先生。」

「うっわ。ムリあるわー」

「五月蠅いから黙って」

身なりを整え頭を下げる除庶。
今更、誤魔化した所で無駄だ。

「白雪…。驚きましたよ。」

「？何のことでしょう？」

まだ誤魔化せると思ってんのか？
諦めなさい。

普通にあの人見て…

「あなたに加虐嗜好があつたなんて…」

「待ってください」

「待てや」

同時に突っ込む。

…驚くトコそっち!?

「まさか、野外でやるなんて思ってもいませんでした。」

「先生!!違います!!」

只の処刑です!!」

「え?処刑!?マジでやめて!!」

何なのこの二人…

話からしてあの人が先生らしいけど大丈夫か!?
問題しか無い気がする!!

「自信を持ちなさい、白雪。
貴女には才能があるわ」

「いりません!!そんな才能!!」

ここつて本当に塾?

「大丈夫よ。」

私とその才能を引き出してみせるわ」

「本当に止めて下さい。」

S Mの才能引き出す塾、って斬新にも程がある。

「すみません。話に入っていないですか？」

勇気を振り絞り話に入る。
なにあるか分かんないからめっさ怖い。

「すみません。」

旅の連れとはぐれてしまっ「探したぞ!!」にみゃあああ!!」

何!?

急に何なの!?

後ろを向くと居たのは仁。

驚かすなよ…

「貴様のせいで旅が進まん。」

このままだと今日は山中で野宿になる。
早く来い。」

「でしたら、私の塾で泊まりませんか？」

襟を掴まれ、連行される時に向こうからの提案。
ありがたい。

「仁。飲んで良い？」

「急ぎの旅の筈だな…

まあ、貴様が良いならそれで良い。

私は慶と忠を呼んでくる。

大人しく待つてろ。」

そう言って消える仁。

あいつ、何？忍者？
チャ。ラ使えんの？

「すいません。お世話になります。」

宿泊は決定。

久しぶり布団…

「ええ。歓迎いたします。

…フツ…若い子が…ジュルリ」

「お世話になりましたー」

帰る！！もう帰る！！

「遠慮する必要なんてありませんよ。
さあ、ごゆっくり。」

中に入れられ部屋を与えられる。
四人なら楽々入るな。

「そういえば除庶どこだ？」

いつの間に居ない。

話相手がいない暇から、俺は除庶を探しに行った。

「先輩。ここの記述なんです…」

「あ。これね。これは…」

教室らしき所で質問に答えていた。
やたら似合っている

「ありがとうございます!!」

「別に良いよ。何回でも聞きにきて」

説明が終わったらしい。
面倒見の良い奴なんだな

「おつかれー」

「…貴方ですか…」

急に雰囲気の変わる除席。
嫌われたかね？

「何やってたの？」

「説明です。分からない箇所があったらしいので」

「熱心だなー」

てか、何の勉強教えてんの、この塾？」

実はさっきからこの塾で教えている事が分からない。

「色々です。」

ここで勉強した事は仕官した後、軍師や文官として役立てます。」

話としてはここは水鏡女学院と言い

将来の官僚的な人の教育をする所らしい。

…女学院？

「じゃあ、俺いるのマズくない？」

「不味いですよ。」

みんな男の人が来たから騒ぎになってますね。
授業終わったら質問攻めにありますよ。」

「マジかい…」

その後、連れが来るまで質問攻めだった。

取り敢えずそのロリッ娘。

下ネタの質問は止めなさい。

てか、水鏡さん。除庶。

お前らが止める。

で、忠が来たら皆一目散に逃げた。

凹むな、忠。

SIDE 賊

「水鏡女学院なら飯、金がある。」

女は多いが戦える奴はいないってよ。」

「まじか…」

「頭。どうしやす?」

「今夜。今夜襲う。女は楽しんだ後に奴隷として売れ」

「「「「「へいつ!」「」「」」」」

SIDE除席

夜になっても勉強だ。

私も卒業が近い。

雖里、朱里は義勇軍に仕官できたらしい。

…私も決めないとな…

…?

足音?こんな遅くに?

気になって外に出る。

誰も居なっ…賊!?敷地内に!!

不味い。皆に知らせないと!!

逃げようとしたが音がして気付かれた!!

どうしよう…向こうは十人ぐらいいる。

…逃げ切れないよ…

伸びてくる汚い手。

だけどそれは急に払われた。

SIDE 仙刀

予感通り！！

嫌な予感で皆、目が覚めた。
賊が来た感じがあった。
完全に的中！！

「女一人に十人がかりって…」

「ああ？何だオメーは？」

「客だよ。ただの」

「あっそ。さっさと消えろ。じゃねーと殺すぞ」

剣を構える賊共。

でも…

「ムリだよ。海皇舐めんな。」

「うるせえ！！やっちなえ！！」

SIDE 除庶

綺麗だった。

賊の手を払い。

助けてくれたのは、あの失礼な人。

苦手意識があっただけど、嫌いだったけど…あの人から目を離せない。

素手で賊を一撃で倒す。

月光に彩られ、まるで舞台みたいだ。

「ぎゃあ!!」

「はぁ、もう終わりか…」

除庶。無事か？」

満月を背負って手を差し伸べる姿は幻想的で…

見とれた私は何もおかしくないとおもっ。

翌朝。

私は布団で寝ていた。

あれは夢だったのかも…

それはない。

頭を振ってその考えを消す
あれは、現実だ。

敷地に人の倒れた跡があるから…

「もう、いくんですか…」

「ん。旅の途中だしな」

先生とあの人、南郷さんの姿。
…もう、いっちゃうのか…

「お？除席。お前も見送り？」

「いえ。

偶然目が覚めただけです。ですが、ついでにしますよ。」

「ふーん。じゃ、行くわ連れが待ってるし。」

そう言って馬に乗る。
やっぱり行くんだ…

「お世話になりました。
じゃあな除席。」

そう言っ出ていく南郷さん。
やっぱり最後はしっかりしないと

「ええ。また会いましょう」

頭を下げる。

しっかりと

頭をあげても、まだ手を振っていた。

あ、落馬…

「ふふっ面白い人。まだ手を振ってる。」

「本当に。」

何となくだけど

仕えるならあの人にしようかと思った。

………

「あー！！」

旅の行き先聞いてなかったー！！」

仁の秘密（前書き）

できました。

原作キャラがやっと増えてきた。

仁の秘密

SIDE 仙刀

俺達は女学院を出て北へ向かう。

もう、けっこう一刀の居場所が近いらしい。

詳しい場所は知らんが…

そして今は

「そういえば仁。

どうやって女学院にいるって知った？」

どうやって、はぐれたのを見つけたのか。

これが気になる。

あと消えたのも。

「ああ。

こいつなはぐれた事に気が付いて必死に走り回ったんだ。」

「慶！！」

「左様。

発見の報の際には、心底安心した顔にござった」

「貴様等！！その口閉じろ！！」

「そうだったのか

悪いな心配かけて」

「心配などしとらん！！」

「何言つてんだ。」

真っ先に心配したのアンタだろうが」

「へー。そうだったんだ。」

よっ！！このオラニヤン！！」

言ったら苦無投げられた。

…意味知ってんの？

「貴様貴様貴様…！！」

あ、切れた。

「仁。ゴメンな落ち着いて
巴とやら見えてきたぞ。」

あの町が今日の所の宿泊所。
取り敢えず仁を宿める。

「ふんつ。さつさと行くぞ。
遅れるな。」

馬を走らせる仁。

俺達も遅れないように走らせた。

「あずあッ！！」

「アンタ…さつさと馬に慣れな…」

兎に角、向かった。

「貴様ら！！賊か！！」

で、早速アクティブに絡まれた。
銀髪に長い三つ編みの娘だ。

「いや。俺達はただの…」

「問答無用！！聞く耳もたん！！
はああああ！！」

「キケヨ！！」

あいては素手か！？
やった！！久しぶりの格闘だ！！

「やつ！！」

「おっ！？」

ふむ。

勢いは良い！！でも…

「我流？」

「答える必要は無い!!」

そう言つて突き!!

引くのが遅い!!

突いてきた腕をとり、
投げるッッ

「くっ!!」

「はい。一本。」

きれいに一本背負いがかかる。

「なめるな!!」

蹴り?

いや、違う!!

「なっ!!」

気弾!?

撃てる奴、本当にいやがつた!!

「屈い!!待ちいな!!」

「その人達は賊じゃないの!!」

向こうから二人来た。

あーあ、面白くなりそうだったのに…

「風、よくみいや。」

この人達、黄色い布つけとらんで」

「何…

本当だな…失礼しました。」

姿勢をただし、しっかり頭を下げてくる。

「このような時代だ。」

疑うのも無理はない。」

「なんでお前がまとめんの？」

「貴様が気にするな、など言ったところで何にもならんからな」

ひどいなこの扱い！！

「申しわけありませんでした。
私は楽進と言います。」

「ウチは李典や」

「于禁なの？」

「ん。俺は南郷だ。」

「冷苞だ」

「雷銅ってんだ」

「張任にござる」

「いきなり襲い掛かって、すいませんでした。」

また、頭を下げる樂進。

礼儀正しい娘だな。

「そういえば、さつきも聞いたけど…
その格闘、我流？」

「あ、はい。よく分かりましたね」

そっか…なら、

「格闘。教えようか？」

育ててみるか…！

あのあと、ここへの短期滞在が決まった。
仁が情報を集めるってさ。
それまで、各自由で過ごすことが決定。
だから…

「じゃ、まずは正拳からだな」

「はい！！お願いします！！」

「師匠！！」

格闘の授業。

師匠になるんだからってことで風の真名を預かった。
ま、俺も風から氣を習うけど。

「しかし、このように習うなんて思いませんでした。
仙刀殿は格闘にどれほど精通しているんですか？」

「ん。」

『海皇』名乗れるぐらいだな」

「カイオウ？」

「ん。俺の号だ。

まあ、弱くないから安心して。
はい、じゃあ正拳から」

「はいっ！！」

ちよつと教えたが筋が良い。

すぐに伸びる。見ていて楽しい。

「あ、さっきのだけど」

「はいっ！！何でしょうか」

やっぱり楽しいねえコイツの相手。

後で俺も凧から授業を受けてみたが、
外気功は無理。

撃てない。

元。玉とか、かめ。め波とか撃てるって期待したのに…

そしてその夜

「凧、きたでー」

「お邪魔なの〜」

凧の家で夕食会になった。

メニューは鍋だ。

因みに俺の連れはいない
先に食っちまったってさ

「おー、ゆつくりしてけ」

「……………」

「…何で南郷はんが作つとるん？」

「凧ちゃん大丈夫なの〜？」

「ああ、修業でやりすぎただけ。
あと、料理スキだしな。」

「ホンマなにやったんや…」

「普通のこと

で、疲れたからって休んでる。」

「普通のことって何や」

「虎とタイマン。

氣は無しで」

「おかしいやろ!!」

「あ、熊ともついでに…」

「ついでじゃないの!!」

「それで無傷。風強いね」

「ホンマかい!!」

「ならなんで倒れとんや?」

「ああ、それね

それなら…」

「その後、風に俺が奇襲かけたからだな。」

「普通やないで!!」

「なんで修業に奇襲がはいるんや!!」

「やられる奴が悪いから」

「…けっこうビドイの」

「仙刀殿。ありがとうございました。
もう大丈夫です。手伝います。」

お、復活。元気みたいで何よりだ。

「そういえば、何作ってるんや？」

李典が聞いてくる

そついや、言っていないな

「やったら唐辛子多かったから麻婆豆腐と火鍋だ。」

「沙和あ！！風近付けたらあかんで！！」

「合点なの！！」

急に動く二人

何事！？

「何！？この献立だとマズイの！？」

「違うの！！風ちゃんに辛いもの任せちゃダメなの！！」

風…何があつたの？

「どうしたん？」

「風は辛党なんや。
それも極度の」

「そうなの風？」

「別に普通ですよ？」

「なら、どんだけ使うつもりか見せてみいや」

ドサツとテーブルに置かれる袋。
中身は唐辛子。それも粉、大量。
見てるだけで辛くなる。

「…正気か？」

「はい。」

「お前これ多すぎだろ！？
常人なら、何年かかると思ってたの！？」

「師匠。それ一日分です。」

「よし！！于禁！！風を離すな！！」

「分かってるの！！」

あんな量食ったら一発でアウトだ！！
俺たちは死にたくない！！

そのまま、凧を料理に参加させずに作る。
料理は好評だった。

一刀が味にうっさかったから身についたスキルだ。
で、凧。

お前本当にあの量をかけるのか…

真名も教えてもらった。

李典は真桜。于禁は沙和だ。

まあ、当たり前の話だ。

俺達は死線を越えた同士だからな…！！

着いてから五日。

仁が二つの情報を手に帰ってきた。

？一刀は、公孫さんの所にいる。

で、？が…

「黄巾賊か…」

最近増えてきた黄巾賊が接近してる、というものだ。

「数は三千。大梁義勇軍は？」

「…約一千です」

淡々と報告する仁に対して凧は辛そうだ。

「戦力差は三倍以上ねえ…」

「苦しい戦になりましょう」

慶、忠もキツいらしい。

…俺も出ないと…

戦争になるなんてガキでも分かる。

殺すのは怖い。

でも、こいつらが死ぬのはもっと怖い。

「あと、朗報が一つ

陳留から、曹操の援軍が向かってきている。

残念ながら先鋒が着く頃には戦だな。

数は五百。ただし精鋭だ。

旗は夏侯と許。

許は知らんが夏侯は夏侯淵だ。」

「詳しいな」

「情報とはこのようなもの。
当然の話だ」

「でも、スゲエ!!」

お前、メツチャ頼りになるじゃん!!」

「…ふん…」

一瞬、嬉しそうな顔して背ける。
本当にオラ「苦無が欲しいか?」

素早い反応。

お前、エスパー?

「とりあえず、私は賊の動向を探る。
貴様等は守りを固めろ」

そう言つて消える仁。

だからエスパー？

「さて、俺達は守り固めんぜ。」

「左様にござるな」

心のなかで仁をこおり、エスパタイプに分類し、俺も二人についていつて守りを固めた。

「真桜？柵どう？」

「どうにもあかんわ。材料たりひん。」

一夜明け、ただ今柵の突貫工事中。
やっぱキツいか…

手伝っていると沙和から伝言が来た。
仁が帰ってきて、援軍が来たらしい。
挨拶に行くか

「夏侯淵だ」

「許楮です」

いたのは青髪で鬼。朗かサ。ジのように髪で片目を隠した娘と
ピンク髪の元気っ娘
援軍の将軍かね？

「凧。この二人が…」

「はい。援軍の方です。」

やっぱりこの二人か
強そうだしな…

「仙刀オ！！敵さん来たぜ！！」

慶からの呼び出し
…いよいよだな…

「仁は？」

「こつちだ。外にいる。
で、配置だが…」

援軍を交えて会議。
仁が配置をくんだらしい。
援軍も快諾よって

東 慶、真桜

南 俺、凧

西 夏侯淵、許楮

北 忠、沙和

遊軍&諜報 仁

の配置が決定。

…戦争は初めてだ。
でも、戦うんだ。

「曹軍本隊もこちらに向かっている。
それまで耐えてくれ」

そう言つて頭を下げる夏侯淵。
いっちょやるか！！

SIDE夏侯淵

軍議を終え、外に出ると
見覚えあるあの方がいた。
軍議中、幾度となく出てきた名前。
そうかもしれない、という期待はあった。
やっぱり、あの方は…

「仁…様…？」

「どうしたんです？秋蘭様？」

聞かれたか…？

季衣を誤魔化して戦場へ行く。
季衣には悪いがこのことは黙ったままにしておく。
確認するのは戦の後で良い。
あの人なのだろうか…

SIDE 仙刀

「なあ、風。お前氣弾で狙撃できる?」

こつちでも一応作戦を立てる。

この戦争で重要なのは、時間稼ぎだ。
それを意識してやる。

「はい。師匠狙えます。」

「なら、ぶつ放して牽制しよう。時間稼ぎだ」

風は俺の教えた空手をすぐに覚え、形にした。
本当にこういう奴を天才って言うのかね?
外氣功まで使える、なんてイヤになる。

「師匠。」

「ん。分かつてる。

全員構え!! 来たぞ!!」

賊がきやがった!!

戦争勃発だな…

「猛虎蹴撃!!」

開幕氣弾!!

これが開戦の合図になった。

「っはあ!!」

化猫での貫手

これと

「っふ!!」

合気道で育てた膝のバネ

これが俺の武器だ

剣術なんて無いから完全に我流
風のこと言えないな…

「師匠!!大丈夫ですか!?!」

「当然!!こっちの台詞だ!!」

他の門から連絡来たか!?!」

「まだです!!」

連絡こないなら今のところ各自上手くやってるらしい。
だけど、援軍もまだか!!

「危ねえ!!」

殺られそうになつてた一般兵を助ける。

目の前で助けられるなら助けるんだっ!!

「冷苞様より御報告!!」

これより8里先に砂埃!!

旗は曹!!援軍です!!」

「よし!!お前等あと少しだ!!必死で守れ!!」

この戦争勝つぞ!!

「仙刀!! 終わりだ!!
援軍が着いた!!」

仁からの報告。
勝ったのか…?

「これで、終わりだ。
旅に出る。二人にも言った。
先に行くからな」

「待て!! なんでそんな急ぐ必要がある!!」

「…曹操は人材集めが趣味と聞いている。
捕まったら面倒になる。」

先に行くぞ。 と言って去る仁
俺も行く。
だけど、その前に…

「悪いな風。
まだ教え切ってないけど行くわ。」

風に別れを告げないと

「イヤです!!」

まだ、教わって無いことが一杯あります!!」

服を掴まれる。

そんなことされて、言われたら別れなくなる。

「でも、基礎は全部教えた。

あとはそれを毎日百回やれば伸びる」

行かないと

「なら、私も師匠に着いていきます!!
だから、もつと色々と教えてください!!」

「そんだけ言える覚悟があるんだ。
大丈夫。強くなれるよ」

あの仲が良い二人と別れる決心があるんだ。
大丈夫。いけるよ

「じゃあな。また会おう」

そう言って別れ、仁たちを追う。

「遅いぞ。

貴様が遅いから雨が降りそうだ。ウスノ口」

「わり、別れの挨拶してた。」

一言詫びる。そして、公孫つて奴の所へ

雨も降ってきた。

仁。

今回で気になることが二つある。

何で、曹操との接触を拒んだのか…

そして、

雨で落ちた黒色の髪から、微かに見える金髪がなんなのか…

仁の秘密（後書き）

完全にフラグ

誤魔化す気は一切ありません

ついに合流南北コンビ！！

SIDE 一刀

公孫賛の所に着いて義勇軍を設立。

これで理想の一步を踏み出した。

…確かに賊は倒さなければならぬ、でも
その戦いで死んだ兵士の家族は笑えるの？

そんなことより、この戦だ

敵は黄巾賊。

数は四千

対してこちらは三千

義勇軍はそのうち七百

…厳しいな。

「申し上げます！！」

趙雲殿が単騎で突撃しました！！」

「何だと！！」

何を考えているんだ星は…」

「朱里ちゃん、雛里ちゃんどうしよう！？」

「はわわ、それでしたら…」

最近、軍師として朱里、雛里が仕官した。

この二人が諸葛孔明とホウ統つてことには驚いた。

そんなことより、この戦だ。

策は

？愛紗が趙雲を助け一旦引く。

？賊が追ってくるだろうから待ち伏せる

？来たら矢を射ち、伏兵を出す

やるしかない！！

策は順調に進み？へ

これで…

「申しあげます！！」

賊の新手です！！数は五百！！」

「「「「「！？」」「」「」

マズイ…

愛紗、鈴々、趙雲は向こうにいる！！

「はわわ！！」

もう余裕がありませんから、早く倒してもらおうよつ伝令を…！！」

「申し上げます！！所属不明の部隊、三百が新手に突撃しました！！」

「「「「「！？」」「」「」

どういうことだ？

SIDE

仙刀ここに来るまでにくらかった。

それも、クビになった兵士。

賊になりかけてた村人、

食うに困り、山賊になった奴等を旅の仲間にしたからだ。

数は三百。

短期間でこれ

…それだけこの国は終わってるってことだ。

目の前で死にかけ、

人の道を外しかけている、こいつらを助けたかったから助けた。

助けられるのなら、助きたいから…

そんな事をしつつ戦場へ。

早く、一刀の所へ行かないと。

「よし！！助けにいくぞ！！」

「待て仙刀。賊の新手だ。

あれを討つ」

「何言ってるんだ？

あっちだって戦っているだろ？

それに一刀も居るから合流した方がいいだろ」

「だが、向こうはあのままなら片が付く。

だが、新手が入ればわからん。」

「んー。確かにそうかもしれないけどさ…」

「俺は仁に賛成だ。」

「拙者もでござる」

慶、忠もか…

「貴様が向こうの遣いと友人だろつが、こちらは寡兵だ。手柄を立てねば会えん。あの賊を止めたら手柄になる。」

「左様。さらに賊は我らに気付いてませぬ。奇襲の型になり、被害も少のうございましょう」

「反論できないな…」

やっぱり戦争になると分からない。こいつらがいて良かった。

「なら、一戦といくかあ!!」

『うおおおお!!』

慶の号令で沸き上がる。こうなると出番が無い。

「仙刀殿。惚けてる場合にございませぬ指揮を」

「必要か？ま、いいけど行くぞ!!お前等死ぬなよ!!」

俺の号令で突撃する!!

絶対に負けない！！

「ヒッハー！！！」

「汚物は消毒だぁー！！！」

「俺の名を言ってみろぉー！！！」

何故だろうか。

おれ達の方が悪党の気がする…

「ハッハー！！！」

「き、奇襲だぁー！！！」

賊は混乱。

このまま押し切る！！

「死ねエエエ！！！」

「戯言無用！！武で語れい！！！」

「らぁぁぁぁー！！！」

「…クズが」

忠、仁も上手く立ち回っている。
当然俺も。

返り血ひとつ浴びてない。
この武器はやっぱり優秀だ。

賊は混乱中、被害も無い。
そこに…

「ほ、本隊がやられたあ！！
新手が来るぞ！！」

「何だと！？
逃げるぞ！！」

駄目押しの情報。
賊は逃げ出している。

「追うな！！相手の方が多勢！！
今は合流だ！！」

仁の指揮。
流石に的確だ。

「仁、忠。これで手柄になるか？」

「十分にござる。」

「なら…慶！！」

「どうかしたかい！？」

「ちょっと一仕事頼んだ」

挨拶でもするか…
あと制服に着替えないと

SIDE 一 刀

「勝った…のか？」

「はい。」

危ない所がありましたか…」

朱里に聞いたらなんとか勝ったらしい。
本当に危なかった。

「すいません…」

本来ならこのような場合も想定するべきでした…」

「大丈夫だよ、雛里。」

雛里が居なければ多分敗けてたよ…ん？」

向こうから人が来る。

あの部隊の人だろうか？

「アンタ等がこの軍の大將かい？」

「うん。そうだけど…」

「へえ…。なら、アンタが御遣いとやらかい？」

「まさ…「なんで分かったんですか！？」桃香…」

隠してって言ったのに…」

「ハッハッハッ！！素直なお嬢さんだ！！」

ほら、笑われた。

「なるほどねえ…」

見てくれは良い。面構えはあの人以下つてとこだな。
まだ、覚悟固まらないかい？」

顔を覗き込んでくる大男。

朱里、雛里顔が赤いけど何を考えている？

「俺等の頭がアンタに会いたがっている。
お目通り願えるかい？」

一際大きくなる迫力。

…飲まないとマズイか…

「ご主人さま、どうする？」

「助けてもらったんだし、お礼もしないと
会おう。」

「はい。私も賛成です。」

「あわわ、会わない方が不味いですね。
でも、念のため愛紗さんと鈴々さんを戻してからでしゅ」

二人とも賛成。

それなら問題ない。

てか、雛里。まだ赤いよ

「よし。話は決まったな。」

俺は報告しに戻るぜ。

あと、これはアンタの物かい？
渡してくれて言われてな。」

そう言うて渡されたのは俺のカバン。
ってことは…

「アンタで正しいかい？」

あの人の言葉は耳に入らない。
俺の中にどす黒い何かが生まれている。

「ふ、
ふふ……
ふは
ははは
ははは
ははは
ははは
ほは
ははは
ほは
ははは
ほは
ははは
ほはは！」

「ご主人さま!？」

「は、はわわー!!」

「あわわー！！」

皆のあわてる声。

それよりも…あいつの処刑だ！！

「ねえ！？大丈夫！？？」

誰、誰が来るの！！」

「正露。しかけたやつ！」

「分かった！！一発殴ろう！！」

「だ、ダメでしゅ！！」

「そうでしゅよ、相手は助けに来てくれたんでしゅよ！！」

「「知ったこつちやない！！」」

「「知ってくだしい！！」」

「大丈夫だ。まともな奴だ

まあ、虎殺しとか、人間凶器とか呼ばれてるぐらいだな。」

「「すいません！！どうか、無かったことに！！」」

「じゃあ、帰るぜ」

「「話を聞いてくだしい！！」」

「「ふははははは！！」」

後で愛紗に説教された…

こんな程度で折れる俺だと思うな…！！

SIDE 仙刀

「おう、仙刀。面会できるってよ」

「よし！

この服着てる奴だったか？」

「おうよー!!」

「ヒャッハー!!」

一刀だな!!

間違いない!

で、お前等。ヒャッハーに共鳴すんな

心の中でモヒカンをたしなめる。

こっち完全に世紀末な人間や

不良マンガのキャラみたいな奴ばっかなんだよな…
よく、賊として討伐されなかったな…

「よっしゃ行くぞ!!」

一刀貴様、ぶっ潰したるけんのお!!

SIDE 一刀&仙刀&三人称

「はわわわわ（ガクガクガクガク）」

「あわわわわ（ブルブルブルブル）」

さつきから、軍師二人の様子がおかしい。
世紀末とか、拳王とか言ってた。

…何があつたの?

「ご主人様。来られたようです。」

愛紗からの報告。
来たか…

「あれが義勇軍の大將にござるか」

「そつちが公孫賛だ。」

慶、忠、仁そして野郎共総出で会見。

居たな…

「ご主人さまが言ってた仙刀ってあの人？」

「確かに、同じ服を着ていますね」

仙刀…

もう、我慢できない！！

「あつ！！ご主人様何を！！」

「愛紗ちゃん。久しぶりの再会だから、見守ろう」

「…分かりました」

「おつ、来たねえ。」

「あいつが一刀で良かったかい？」

「ああ、慶。十分だ。」

「一刀が走ってこっちに来てる。
俺も！！」

「仙刀オオオオ！！」

「はわわ…感動の…」

「再会でしゅね…」

「一刀オオオオ！！」

「全く。あの男は…」

「うむ。これで旅の区切りにござるな」

「仙刀オ！！」

「やっと…やっとだ！！」

「一刀オ!!」

これでお前を…

「死ねやこのド腐れ野郎オオオ!!」

ぶっ殺せる!!

「えええええ!!?」

「いよっしゃあああ!!」

感動の再会は、ラリアットから始まった。

「一刀オ!!お前のせいでこんなところに来たじゃねえか!!
塩食い過ぎて自殺しろオオオ!!」

「お前が鏡割ったからだよ!!
頭破裂させて死ねえ!!」

「うるせえ!!人のこと道連れにしゃがって!!
反省しろ!!」

罵倒のやりあい。
さらに殴り合い。
醜いにも程がある。

「悪いのお前だろうが!!
てか、さっき!!」

お前等、よっしゃあとか叫んだのだゆこと!!?

「あらかじめ殴ると言っただけだ!!」

((この糞野郎が!!))

だが、この二人考えるのは全く同じ。
仲の良さについては賛否が…別れるか？

その傍ら、義勇軍陣営は…

「え？何！？どうなっているの!?
愛紗ちゃん止めて!!」

「分かりました!!
貴様ああ!!ご主人様に何を…!!」

「待つて!!武器置いて!!」

「ご安心を!!
まとめて叩き斬りますから!!」

「ダメだよ!!
鈴々ちゃん!!お願い!!」

「お兄ちゃん頑張るのだ!!」

「ダメでしゅ!!完全に楽しんでましゅ!!」

「白蓮ちゃん!!趙雲さんお願い!!」

「桃香…あれをどうしろと…」

「ふむ。アレを肴に酒も乙なものですな」

「何とかしてえええ!!」

桃香が苦悩していた。

で、一方仙刀御一行は

「よし!!右だ!!狙え!!」

「下がスキだらけにござる!!」

「顎だ!!やれ!!」

「ぶっコロせえ!!」

お楽しみムードだ。

「すみません!!あの喧嘩止めてください!!」

そこに入る桃香。
ある意味勇者だ。

「止める必要なんかないさ
二人ともあんなに楽しそうだ。」

「すみません!!」

ご主人さまが一方的に殴られているんです!!」

気が付いたら一刀はマウントポジションを取られ、フルぼっこナウ。

「ふん。安心しろ。仙刀とて鬼ではない。加減してる」

「あの人の拳、真っ赤だよ!？」

気が付いたら仙刀の手は綺麗な深紅。ヘモグロビンが付着しているのだろう

「安心なされよ。殺しはいたさん」

「じゃあ、あれは!？」

そこにはバックドロップを決める仙刀。一刀の完全敗北の瞬間だ。

まあ、こんな形で再会した。

ついに合流南北コンビー！（後書き）

やっと合流。

これから悪ふざけが加速します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7075y/>

真・恋姫†無双～南北コンビの三国志～

2011年11月29日19時54分発行